

與古田・與久田・宇久田に、清村・福村・福原・中村・中田・中元を慶世村・譜久村・仲村・仲田・名嘉元に改めさせてゐるの類である。かうしたものは祖先の原名に復姓した方が便利であらう。

六一、黑白の對立

黑白といつたら烏鷲合戦か、圍碁勝負みたやうな命題だが、今はいざ知らず古琉球ではさうした色分けがあつた。先づ黒は支那黨、白は日本黨とでもして置かうか。五百年間も日支兩屬の狀態にあつた琉球のことだから黑白が出来るのも亦止むを得なかつた。随つて其の淵源する所も古い譯で、日本へ留學した佛僧が日本思想の代表者であり、明清へ留學した儒學者が支那思想の保持者でいづれも琉球の政治に干與して表裏共黑白對立の氣分が漂つてゐたのである。薩摩より征服された當時三司官の要職にあつて支那の威を藉り本土を輕視してガンバリズムで押し通し遂に之が爲めに國の方途を誤らしめ慘禍を蒙らしむるに至つた鄭洞（謝名親方）は最も代表的な支那黨であり、其の廢殘の後を受けて疲弊琉球の挽回に盡瘁した羽地朝秀（向象賢）の如きは日本思想の代表者である。

而して黑白が最も激烈に表面化したのは愈々廢藩の前後であつた。當時日本黨を白又は開化黨と稱ふるに對し、支那黨を黒又は頑固黨と呼んでゐた。白の代表者ともいふべきは維新慶賀使となつて上京した伊江王子や宜灣朝保等で能く時勢を洞察して藩國の進むべき針路を指示したが、一方黒頑派は支那の膨大を頼んで

當藩往昔より皇國と支那とに屬し、兩國の指揮を蒙つて政體宜しく相成り、藩用の物件も辨じ居り御恩恵申し盡し難く、御兩國を父母の國と仰ぎて忠義を勵み度、隨つて進貢冊封等差止むれば親子の道も相絶え累世の厚恩忘却し信義に背く事故従前通り御許可せられ度、年號並職制變革の儀も從來通り仰付けらるゝ様致度

といつたやうな陳情文を提出したりなどしてゐた。

彼等の中には支那へ復藩陳情に出掛けたものもあつたが、外藩の爲めに出兵したことの無い支那は幾年経つても到底あてにはならなかつた。

然るに此の黑白對立は明治二十七八年日清戰爭の終結を一轉機として思想上の一大變化を來し雨降つて地固まるの譬に漏れず遂に悉く解消してしまつた。

六二、復興の礎を築いた向象賢

慶長十四年薩摩から征服された後の琉球は、大島諸島は奪はれ、支那貿易の利潤は壟斷され、加之貢租は二重に搾られるといった調子で、年月の經つに従つて經濟は疲弊の一途を辿るのみであつた。此の時に方り聖人といはれた尙亨（具志川王子朝盈）は攝政の重職に在りて畢生の努力を傾注したが猶ほ之を挽回すること能はず、寛文六年挂冠して羽地朝秀（唐名向象賢）と交替することになつた。象賢は其の著「仕置」の中に、

大和の御手内に成り候て以後四五十年以來如何様に御座候て國中衰微致し候哉

と嘆じ、島津氏の征服後士族は自暴自棄となり社會の秩序著しく紊亂してゐるのを恢復すべく献身的に努力した。それは彼の物した左の一文を以ても知ることが出來よう。

右七ヶ年の間夜白精^{ひびく}を盡し相勤め候に付國中の仕置大部調ひ百姓に至る迄富貴に罷成候儀乍憚獨力にあらずやと存候、之に依て根氣疲れ果て候云々

向象賢は又實に日琉同祖論の首唱者である。彼は仕置の中に、

竊かに惟ふに此國人生の初は日本より渡りたる儀疑無御座候、然れば末世の今に天地山川五形五倫鳥獸草木の名に至る迄皆通達せり、然りと雖も言葉の餘り相違ふは遠國の上久しく通融絶えたる故なり、五穀も人と同時に日本より渡りたるものなれば……

と述べて琉球人が大和民族であることを強調し、以後由緒ある家の子弟と雖も學文・算勘・筆法・謡曲・醫道・料理・乗馬・茶道・生花等の中一つでも嗜んでゐないものは官吏に採用しないと宣言し、盛に本土藝術を獎勵して本土化に努めた。

彼は一大英斷を以て諸政を改革し、制度を革め、農務を勵まし、苦心慘憺以て疲弊琉球の經濟を挽回すべく盡瘁した。仕置の結尾には、

右の仕置大形に候て御國元（薩摩）より國の下知未斷の故國俗壞れ行候儀役人の曲事と仰付けられ候はば、我々迷惑に及ぶべく候間前以て申出候、若し恨に存ぜらるゝ人は羽地相手に成るべく候、少も一身惜み申さず、國の耻辱には替へ間敷候如何様御返答承るべく候

と斷言してゐる。事實向象賢の必死の活動によつて困憊せる琉球も復興の曙光を見、彼の死後七年にして生れた蔡溫によつて愈々完成せられ再び黄金時代を現出するに至つたのである。

向象賢は疲弊琉球挽回の礎石を築いたのみならず又日本文化を移入した大恩人である。此の意味からしても縣民は蔡溫に對すると同様に將來何等かの形を以て報謝の誠意を披瀝すべきであらう。

六三、六諭衍義を廣めた聖人程順則

徳川吉宗將軍の時代より明治の頃迄全國に修身教科書として使用せられてゐた本に「六諭衍義」といふがある。六諭とは洪武年間明の太祖の聖旨を宣布されたもので、父母に孝順、長上を尊敬し、郷里に和睦し、子弟を教訓し、各生理に安んじ、非爲を作す母れの六項である。之は明末から清朝の初頃に再び盛になつた爲め後世康熙帝又は順治帝の勅諭であるかのやうに誤傳されてゐる。

程先生は康熙年間支那留學の時、此の本が其の師たる竺天植先生の机上にあるを繙讀し、即ち懇望して持歸つたのである。其後四回目渡清の時、福州琉球館に於て私費を投じて之を上梓し、而して琉球へ廣めることにした。後琉球より幕府へ献上、吉宗將軍は荻生徂徠に序文を作らせ、

室鳩巢先生に和解を命じ享保六年印刷して各藩に配り、各藩亦之を翻刻して領内に普及せしめ、かくて明治に至る迄日本全國の修身書に使はれてゐたので是れ全く順則先生の播いた種であつた程順則は唐名で、本名は名護龍文と稱し、俗に名護親方と呼んでゐても知らぬ人はない。

程氏は寛文三年那覇久米村三十六姓の家に生れたのであるが、其の父泰祚は本書寶刀物語にある京阿波根の裔で、首里士族より入つて程氏の家を繼いだのである。父は古波蔵親方と稱し都通事となつて渡清し、蘇州に於て客死した。彼は賢母の手に育てられ、二十一歳の時福州に留學し陳元輔の門に入つて朱子學を受け、四年後歸國して久米村の講讀師となり、元祿二年再び福州に赴き三年間研鑽を積んで歸り、全九年進貢使と共に三度支那に赴いた。此の頃から順則は一代の鴻儒と推稱され、後尙貞王世子尙純・世孫尙益公の侍講となり、經書詩文を講じた。寛永三年四度渡清し、正徳四年には尙敬王繼統謝恩使として薩摩へ遣され、又將軍家繼公の繼統の時、掌翰使として慶賀使の一行に加はり江戸へ上つて、荻生徂徠、室鳩巢等の碩儒と交り、歸途京都鴨川なる物外樓に於て攝政近衛家熙公の爲めに詩を賦して大に感賞を蒙り自筆の軸物其他賞品を頂き、又薩州では島津公の命により木村探元畫伯の畫に題贊をなしたといふ。

順則は十五歳の時父の跡を繼いで古波藏地頭となり、漸次累進して享保五年紫金大夫に進み久米の行政官たる惣役となり、全四年三司官座敷に拔んでられて知行八十石を頂戴し、同十三年十六歳の時名護間切總地頭職に榮進し、同十九年七十二歳を以て世を終つた。

程先生は道德の實踐を以て儒學の本領と爲し、遂に一代の師表として尊敬せられ、三尺の童子も襟を正したといふ。其の卓越せる識見と偉大なる人格とは家庭にありては懇切丁寧婢僕に及び出でては郷黨を薰化し幾多の感話を残してゐる。

嘗つて進貢使として北京に赴いた時、山東省曲阜の聖廟を拜し、琉琉廟學記略を書いて納めた。久米の聖廟は彼の父泰祚が監督の任に當つて建てたもので、彼は至聖廟記、廟學記、關帝廟記等を書き、二度目渡清の際十七史一千五百九十二巻を購つて久米聖廟に寄進し、又清國詩選數十部を求めて政廳聖廟等に献じ、中山詩文集を刊行して國王に献じた。彼の著した指南廣義といふ本は天文氣象の書として有益なるもので斯界の權威岡田武松博士は之を獨逸文に翻譯して世界の學界に紹介したことがある。

那覇孔子廟に隣れる明倫堂は實に程順則先生の創建したもので、中に啓聖公及四賢父考を祀り二百年間久米村子弟の學校として幾多の人材を養成した建物である。

順則先生は聖人として今も景仰せられてゐる。昭和九年没後二百年に當れるを以て祭典を執行し、且つ波上宮通り天尊廟域内に「程公祠」を建て、祀ることになつた。

六四、三府三十六島

古來琉球は三府三十六島と稱してゐる。如何にも「大琉球」といつたやうな感じがするけれど、三府とは中山・南山・北山のこと、主島沖繩島を三府に區分し、其他琉球王の管轄は大小三十六島の多きに達してゐるといつた稱へ方である。文献では寛文三年來琉して尙質王の冊封使張學禮の琉球紀に「教化三十六島……」を始見と爲すとのことであるが、實は琉球の碩儒程順則が、國圖をかいて三十六島と注したのが起りだといふ。嘉慶五年來琉した尙溫王の冊封副使李鼎元の題字にも「……三十六島環中山」といふのがある。しかし琉球は必らずしも三十六島ではない。之は支那式に、三十六峰とか、三十六計とか三十六詩仙とかいふ縁起のよい數で、我國でも三十六歌仙があり、猶ほ明國から歸化した久米村の三十六姓もある。

偕て三十六島とは何々を指してゐるか、といふに、前記の如く沖繩本島の外に、大島諸島より八重山諸島に至る迄の島々を列挙してゐるのであるが、それも正確なものではない。

正史中山世譜琉球輿地圖に三十六島を列挙し、東四島、正西三島、西北五島、東北奄美大島八島、南七島、西南九島としてゐるが、其他に人居あるもの十四、五島もあつて凡そ五十餘を算してゐる。しかも大島諸島が分轄されても猶ほ三十六島と呼んでゐた。

豊かなる御代や三十六島までも

遊び楽しみゆることの嬉しや(作田節)

六五、傑出せる大政治家蔡温

慶長後疲弊琉球の挽回をなすべく向象賢の築いた基礎の上に立ち其の經綸を繼承して遂に沖繩を盤石の安きに置いたのは蔡温である。二百年後の今日迄具志頭親方といつたら三歳の童子と雖も知らない人はない。

蔡温以後琉球の三司官は四人居たといはれてゐる。勿論一人は己に故人となつた蔡温がいつで

も参加してゐるわけである。それは彼の遺した經綸や著書などが常に金科玉條となつて後の爲政者を鞭撻し指導してゐるからである。かう考へると蔡温は琉球古今獨歩の大政治家といふことに異議を挟む人はあるまい。それ程彼は傑出してゐたのである。

蔡温は明の洪武年間に來琉した三十六姓の家に生れ、父は志多伯親方蔡鐸で即ち正史中山世譜の編修等に携はつた人である。温は幼年の頃は凡庸で一向學問を覺えなかつたが、十六歳の時同僚に侮辱され、それから發奮して學業に勵み、二十一歳には讀書の師匠、二十五歳には講談の師匠に擧げられた。二十七歳の時進貢存留役として支那へ渡り、福州滯在中凌雲寺で或る隱者に遇ひ五ヶ月の間人生實用の學につき有形無形に涉つて秘旨を授けられ、二十九歳歸國した時は、實力衆を抜き、三十歳には世子尙敬の御召師匠を仰付けらるやうになつた。翌年尙益王薨去世子統を繼がれたので首里赤平村に家屋敷を賜はつて之に移つた。之より官位累進し四十七歳の時には三司官に選舉せられ具志頭間切總地頭職に補せられた。彼は國師でしかも三司官の榮職に昇り、七十歳の正月尙敬王の薨去迄四十年の久しき間要職にあつて國務に盡瘁した。

蔡温は政治・經濟・道德・産業其他有ゆる學問に造詣深く隨つて此等に關する多くの著述を遺

してゐる。彼の事業の最も偉大なるものは農林行政の根本的確立であつた。琉球は絶海の孤島であるから材木薪炭の自給自足をモットーとし、當時荒廢に歸してゐた山林を巡察して有用樹の植栽を奨励し、總山奉行其他の取締りを置いて守護に任じた。爾來二百年の間に林相全く古へに復活するに至り、唐船の築造、王城の建築は勿論一般民間の需要悉く充たすことが出来た。其他海岸には潮垣、山には猪垣を設けしめ、部落及農地の周圍には抱護林を設けて風潮潮害を除かしめることにした。

猶ほ農務帳を各間切に配付して農業の方法を授け、農政の制度を改め、殊に食糧の自給自足を高潮し、豊年に於て甘藷大根の切干を奨励して凶歉に備へしむるなど用意到らざるなく、其上棕梠・桑・楮・芭蕉・藍・疊表・木綿・苧麻・煙草等特用作物を植付けしめ、繩綯・製油・製紙・織布・染色・製蕨等の副業を奨励し、後田地奉行・惣耕作當等を置いて農政機關を整ふるに至つた。其他河川を改修し、橋梁を架設せしめ、港の浚渫を勧め、溜池を開鑿して灌漑を圖り、且つ農村娛樂の方法を講ずるなど擧げて數へることが出来ぬ。教條も彼の創案であるといはれてゐる。彼は老軀を厭はず尙穆王冊封の大典終了迄國事に貢献し、七十一歳に至つて退役、紫地五色浮

織冠（按司の冠）を頂戴し、與力二人赤頭奉公人四人を召附けられ養老米二十石を賜はつたが、寶曆十一年（二四二一）十二月八十歳の高齡を以て眠るが如く世を辭した。尙穆王及び王族は其の邸に臨みて弔問且葬費及物を賜ひ、國葬といふ程の盛儀が行はれたといふ。

大正四年御大典に際し特に其の功勞を思召され贈正五位の恩命に浴した。今は郷社世持神社に祀られてゐる。

六六、琉球政治の要訣

蔡溫の遺著を見ると、彼は口癖の如く「御政道の本法」といふ語を用ひてある。要するに琉球の政治に携はるものは何人と雖も、此の政道の本法を諒解してゐなければならなかつた。然らば偉人蔡溫は如何なる具體的條件を以て所謂「本法」としてゐたか。彼は之を箇條書にして示してゐるのではないけれど、彼の著書獨物語・家内物語等を熟讀玩味して見ると明瞭に知ることが出来る。以下之を列記して見る。

一、自給自足を國土長久の計とすること。

國の成立には木・火・土・金・水の五行必要なり、金は薩州よりの輸入にて足るも木は絶對輸入すべからず、故に農業・林業等琉球にて消費すべき衣食住の物資はすべて之を當地にて産出し取へて移入せざる方針を樹立すること。

二、日支兩國に對する對策を講ずること。

(1) 江戸幕府に對する謝恩使（琉球王繼統の時謝恩をなす）慶賀使（將軍の繼統又は儲君誕生等祝賀の場合）年頭使等派遣に對する準備をなすべきこと。

(2) 薩州島津公に對する謝恩・慶賀・年頭使派遣並に琉球王太子上國（薩摩留學）に關する準備をなすこと。

(3) 支那に對し進貢・冊封及世替（支那の革命）等に關する對策を講ずること。

三、風旱に對する政策を樹立すること。

(1) 防風林・抱護林・潮垣・猪垣等の造成をなすこと。

(2) 公儀及間切に於て備荒貯蓄をなすこと。

(3) 平時に於て食糧の貯蓄、甘藷・大根等の切干（切干）又は蔬菜類の干葉（干葉）、蘇鐵の植栽等飢饉の對

策を考慮すること。

四、人口増加に關する對策を講ずること。

衣食住の充實を圖ること。

五、地頭以下士農工商の心得を勵行せしむること、殊に上司は一般官民の模範たるべきこと。

(1) 各自の職務及職業に精勵し、奉公第一主義を奉ずること。

(2) 身持を謹しみ殊に酒・色慾・財慾の戒を守るべきこと。

附

(1) 南蠻取締を怠らざること（異國船に對する對策）

(2) 國防に注意し、武道（弓・鐵砲等）の稽古を怠らざること。

(3) 通商貿易のため農閑等を利用して各浦の浚渫及び築港をなすべきこと。

六七、琉球藩の庶民教科書「教條」

此の本は享保十七年首里政廳より頒布されたもので、一般藩民の朝夕服膺すべき道を諭され、

各村では集會の際、折々之を講釋して人民に聽き取らせたとのことである。其の大部分は、新體制の今日に於ても猶ほ金科玉條たるを失はず、言々句々實に熟讀玩味すべき好著である。爰に其の數ヶ所を要約引用して見ることにする。

- 一、政治の儀は主君第一の御勤に候へ共、國中萬事の儀御一人にて遊ばされ難き故諸役人を召立てられ皆の働にて御政道を行はせらる御事に候へば奉職人は申すに及ばず田舎諸島の者迄大小を問はず皆以て主君の御補助人と心得隨分入精相勤むべく候（國民總動員のこと）
- 一、役人は百姓と相變り殊更忠義の心を第一と存じ御奉公相勤み、品行正しく、子孫を教訓し正道を行ふべきこと。
- 一、地方吏員は農民を大切に存じ納稅滯りなきやう勤まし、風俗迄品能く相糺し、貯へ方入精凶年に差當りても百姓痛まざるやう平常萬端入念にすべきこと。
- 一、人間の道と申すは孝行第一に候其身の品行を慎み家族親類睦ましく、就中奉職者は國家のため如何にも入精、農民等は家業油斷なく夫々父母を安心させ候儀孝行と申すことに候。
- 一、身命の儀何の寶物よりも大切に存じ保養致すべく候。病身に罷り成り候ては何分相働き度

思立ち候とも存じの儘罷り成らず候。（中略）若し忠孝の儀に付いて身を捨つべき訣差し當り候は、其の時は露程も惜まらず相働き候儀、末代迄の高名、先祖子孫の面目に候。其の他の儀について輕々しく身を捨て候は、愚痴至極の舉動甚だ以て宜しからざる事に候。常々其の了簡肝要たるべきこと。

一、夫婦の儀は人間萬事についての根本に候。此の心得を以て如何にも睦ましく義理正道熟談致し萬事入念すべく候。各異見相構へ候は、夫婦の道相立たず誠に家道の妨宜しからざること候。

一、子供素立て候儀家中第一の勤に候。幼稚の時より氣持心持、言語舉動の類能々入念に教訓相加ふべく候。尤も見馴れ聞馴れ（環境）の善惡次第にも變化致すべく候間是れ亦能々心得あるべく候。大抵二十歳迄には善惡の差別相定まるべく其の内、別して教訓專一に候。家の盛衰は子供の善惡次第に罷成り候儀承知の通りに候。

然る處世間往々自分の好きの道樂には夜晝入念、子供の教育については夫れ程の念力これなく輕重忘却の筋甚だ以て然るべからず候。

貴人富人の子供は別して教訓肝要に候。榮華に相素立て候故其の身の行末忘却致し、或は勤務に油斷有之或は物ずきいたし或は驕奢に溺れ世人に疎んぜらるる向多々有之候。父存命の間は兎角に候へ共父の死後に至り屹度迷惑すること案中のことに候。此の了簡を以て平素教訓相加ふべきこと。

一、酒の儀は酔に及び申さざるやう之を用ふべく候。酔に及び候はゞ、身命の痛み、家法の支へ、風俗の妨げ、旁以て宜しからず上下共存知の通りに候。且亦女色を好み候儀其の身の名折れ、家中の痛み、尤も風俗の妨げ宜しからざる儀上下共存知の前に候。

一、家中の儀大抵十ヶ年、二十ヶ年の前後には不幸これある積に候。不幸打續き衰微致し候方は随分氣力を勵まし萬事油斷なく相働き候はゞ如何程衰微の苦差し當り候とも其の家の再興致し候儀必定のことに候。

一、人間と申すは總べて天性五常の徳備はり居り候故、上下萬民、才柄無柄皆以て國家有用の材に候。然る故諸士を始め田舎諸島末々の者迄、一視同仁御慈愛に思し召され御政治御入念に遊ばさるる御事に候。然るに不届のことを仕出し世間の妨げに相成る者を終に罪科に問は

るること有之候。斯く大切に思召さる萬民の内一人にても罪科を申付くるは痛ましく思し召さるる御事に候へ共是れ一人を罰して萬人を御助け申す筋を以て是非なく罪科を召行はるる御事に候。老若男女共とくと承知致し各々正道を履み行ひ國家の御奉公肝要たるべきこと。

以上御調べの上申渡候。諸士並田舎諸島末々の者迄具さに拜承し奉るべきものなり。

享保十年十一月十八日

評定所

具志頭親方
美里親方
伊江親方
北谷王子

六八、入墨は成女のしるし

古琉球では婦人の手甲に入墨を施す風習があつた。現今は勿論此の民俗は行はれてゐないが、六七十歳以上の婦人の手には今でも残つてゐる。

入墨のことをハツキといふのは針突のことで、木綿針を十個位平つたく括りつけ、唐墨をすつて手甲に突刺すのであるから其の苦痛は並大抵ではなかつた。

偕て何が故に斯くの如き残酷なことを敢へてしたかといふに、慶長年間薩摩から琉球へ遣はした覺書の中に、

其地の女、關東（徳川幕府）より御用の由候間五人程先々差渡さるべく候。但十二歳より十九歳迄の女遣はさるべき事。

とあつて、それ以來琉球の女は入墨をなす風習が始まつたと言傳へてゐる。しかし入墨は極めて原始的な習俗である。ポリネシアの文身は元服の證であり、其他男女共多く思春期に達した頃に行はれるといふ。京都帝大の依嶋により予が縣下各島に就いて調査する所によれば必ずしも結婚と同時に行はれたものではなく、婚期の早い女は二三年の後に施し、又婚期の遅れたものは數年前に施してゐる。要するに一人前の女になつた證左に入墨をなすものと斷じてよい。而して其の理由とする所を聞くに大體次の様になつてゐる。

(1) 有夫の証として施す（貞操を守るしるし）

(2) 死後極樂に行けると言傳へてゐる。

入墨を施さないと死後葦の根を笊の七杯掘らされる故に年頃の女は死骸に墨で描いて入棺することもあつた。

(3) 入墨しないと本土へつれて行かれる（大和奥様といつて世間に笑はれる）

(4) 子孫の爲めに施す（初孫を儲けた時又は五十歳を超ゆる頃丸星を扇面形に廣めて墨を濃くする）

兎角彼女等が之を信仰的に施してゐたことは次の琉歌によつても知ることが出来る。

錢金やあても後生までや持たぬ

後生に持つものや吾爪はづき

次に入墨の紋様は本島内に於ては地方と階級とによつて多少の差違はあるけれど何れも大同小異で、沖繩島附近と先島（宮古・八重山）とは可成りの差別がある。凡そ指の上に矢の如き形を刺したものは指星といひ、魔除けの意を寓したものと思はれるが又一には一旦嫁げば歸らぬ意だとも解してゐる。指星の上に楕圓形のホーミ形（イソアハモチに象る）其の上部に手玉・サスカ

五ツ星・アーマン形（ヤドカリに象る）などの名稱がある。五十歳位になり初孫が出来ると、手玉の圓形を更に扇子形に改める習慣になつてゐた。

先島婦人の入墨には、當人の創案になる上布模様を施したものや御膳形・握り飯・御箸形など米の飯を載く身分を希ふ意を寓したのもあり、銚・鋏・盥・風車・糸繰等沖縄本島地方のそれと大分趣を異にした圖案がある。又縣下全般的に偶には男子の腕にも銚や矢の形を刺入れたのを目撃することがある。之も矢張り魔除けの意を寓したのであらう。以前は婦女が集ると銘々手甲の點黥を較べて色の濃いのを誇る風習があつた。久米邦武博士の日本民族説の中に、

「前略。文身の民を率ゐて南（福建廣東）に遷り、其の君長が文身の族を韓半島まで植付けて聯邦をなしたるは周代の事であらう……」

と述べて居られる。猶ほ日本史履仲天皇の條にも淡路へ行幸の時點黥の民があつたやうに見えてゐるから本土にも文身の俗があつたのである。

六九、古琉球の飢饉對策扶助

琉球は小藩ではあつたが、久しく日支兩國の連鎖ともなり、南蠻貿易を盛にして獨特の發達を遂げた丈けに、其の藩内の施設はすべて環境に即し、秩序整然として之を本土の諸藩に比しても敢へて遜色がなかつた。

楮て古琉球に於て行政上最も意を注いだのは「飢饉の對策」であつた。蔡溫は常に「自給自足」を根本政策としてゐた。それは海南洋中の島嶼であるから物資輸入の便利が悪く、しかも年々風旱の災害に悩まされてゐるからである。彼の山野に自生してゐるが如き蘇鐵も實は昔人口一人當り何本と指定して植栽せしめたのである。蔡溫は其著「家内物語」の中に、

一、村々貯藏仕立て年々貯へさせ候米錢定に以て其の村惣人數の助命に相係はり肝要なる物にて候間何れも入精、毎年貯相増し候計らへ第一に候。

右貯の外にも色々相働き上毛作並に干葉など調へ置き凶年差當り候共、貯藏構ひなく相濟み候様相考ふべく候。

一、北方極寒の國は飯料（食糧）不足勝に有之候故平時干葉の貯へ入精、飯料の補ひに仕候由當地は寒國にて無之候へ共四方大海には大風ヶ間敷有之其上大旱或は長雨相逢ひ候時作毛の

妨げ相成り飯料不足仕り百姓町人難儀に及び候儀度々有之候。然れば當地は寒國同斷にて干葉平時入精すべく候……と述べて藩民を警めてゐる。

備荒貯蓄 儲て琉球藩時代には「圍米」と稱する備荒貯蓄の制度を設けさせてあつた。而して之には政廳にて直接貯蓄するものと地方各間切島(村)に於て法定の貯蓄をなさしむるものと二通りあつた。中央倉庫では千五百石を貯藏して毎年其の一半を新米と交換せしめ、地方にありては人口及び土地の廣狭に應じて各定額の貯藏をなさしめ、三年毎に新穀と更新せしめてゐたといふ。此の制度は尙敬王以來廢藩置縣迄存續してゐた。今でも若し國家有事の際海島の交通杜絶することあらば忽ち食糧の缺乏に陥り、縣民の生活は四苦八苦の慘狀を呈すべく、蔡溫の警告を忘却せる罪觀面に現出せぬとも限らぬ。猛省すべきことではあるまいか。

飢饉對策 藩では前述の如く備荒貯蓄によつて萬一に備へたが又非常時には間切中の富裕者に命じ御貸上げ米と稱して公庫の缺乏を補はしめ、或は其の貯藏せる米粟を發給して附近數ヶ村落の窮民に貸給して救助をなさしめ、かくして功勞ある者には位階を賜うて之を表彰してゐた。

(拙著善行美談參照)

七〇、共存共營と相互扶助

納税與制度 昔の納税制度は地頭代(村長)をして完納の責任を負はしめ、若し滞納未進ある時は間切(村)をして之を辨償せしめ以て公庫の缺損なからしむるやうにしてあつた。そこで間切は之を各村(字)を單位として賦課し、村は更に之を與に負擔せしむるの制をとつてゐたから今日の如く滞納の爲め缺損を生ずることは尠かつたのである。

並木と抱護 沖繩では今でも田舎を旅行してゐると街道の兩側に松樹があり、恰も日光參詣道路の杉並木を聯想せしめる。之は風致の上からも亦暖國の「日よけ」としても實に好適の施設である。又村落の周圍及び海岸の高原等は大抵老松を以て圍繞してある。之も皆舊藩時代からの防風施設である。

潮垣と猪垣 琉球群島の津々浦々には小笠原島でいふ「タコノ木」即ち琉球バナナの原料ともなる「阿旦」と稱する熱帶植物が繁茂してゐる。之は藩時代に防潮林として栽植せしめたもので「潮垣」と呼んでゐる。此の潮垣は最も琉球の郷土に即したもので、怒濤のために現代文明のコン

クリーや石垣の防波堤が根こそぎに破壊される場合も此の潮垣は平然としてゐる。此等は皆藩政時代共存同榮の協力作業に依るものであるが、其他猶ほ幾多の餘澤が遺存して縣民に恩恵を與へてゐるものがある。

青家 今でも國頭中頭あたりで實行してゐることであるが、字内に火災のあつた時は協力して消防に努めるのは勿論何處も同様であるが、此の場合には字民各戸共同して山野に入つて樹を伐り、茅を刈りて來て一日の中に方二三間位の假屋を建て、やる。之は生木なまきを使ひ青茅を以て葺くから「青家」と稱する。是れは古來相互扶助の風習にして字民の義務になつてゐる。

炬々よー 之は亦今ではなくなつたが、餘所では見られない便利な扶助方法であつた。明治三十年頃迄今歸仁村に残つてゐたが、旅行者が行暮れて暗くなつた時、村落の入口に立つて「炬々よー」と聲高に呼ぶと字内に應ずる聲があり、直ちに燒松たいまつに火を点じて來て渡すのであつた。そして半里もゆくと又例の通りに呼んで、燒明をつぎたして貰ふので、店も提灯もない時代のこととして非常に難有いものであつた。しかもそれはすべて無償であつて村で其の擔當の家へ若干の費用を支出してゐたのである。

葬儀 葬式の時各戸字民が出て、墓場の手入、造花や生花の準備、台所の煮炊、さては

籠 (棺を納れて運ぶものにて共同にて仕立てる)を擔ぎ出すこと迄一切の事を夫々分擔し、聊かも厭ふ色がないのは何處までも相互扶助の精神が徹底してゐて人情が美はしい。

迷人探し 村では時々迷人が出る、氣が觸れて家出をするものや、海山へ行つて行衛不明になる人などがある。此の場合は銅鑼大鼓を叩き、或は法螺貝を吹いて字民を總動員し、夫々手分して處々方々を探し廻るのである。

其他田植・製糖・家造り・墓普請等の際「雇ひ廻り」と稱して互に夫役を出して扶け合ふ習慣は何處も今も變りはあるまい。

七一、絢爛たる琉球紅型

我が國服飾界の覇者は友禪染と加賀染とであつたが、十數年前突如中央に紹介せられた琉球紅型は一躍して斯界の王座を占むるに至つた。紅型は其の名の如く紅を主要染料とし型紙を當て、染出すのであるが、紅とは南清より輸入する醒臙脂せうえんじ、之は元々暹羅の産で臙脂蟲(コチニール)

の色素をとつて綿に浸み込ませたもので、之に輸入品の朱や琉球土産の山藍、福木皮、鬱金などの三原色を種々配合して華麗なる模様を染めるのである。而して其の圖案は松竹梅・櫻・菊・かきつばた等花鳥又は扇面、網代等各種縁起のよい紋様を以て構圖し大體に於て純日本風の圖案を型の拘束の範圍に於て郷土化したもので支那南蠻方面の圖案は割合に尠ない。けれども其の淵源する所を尋ねると、紅といふ言葉自身が己に印度のベンガルから出發し琉球ではベンと稱し、ベン型と呼んでゐるからベニといふよりも一步原語に近いのである。

型染も其の起原は多分南蠻更紗の手法に暗示を得たものであらうと言はれてゐる。我が國では平安朝の頃此の型染が行はれてゐたから、此の型置の法が琉球に將來せられて紅型の原流をなしたものであらう。兎角友禪染の本體が描繪の世界を求めたのに對し、紅型は終始一貫型染の手法を固守し、工藝として其の本道をはづさなかつた所に強みがあるといふ。

抑も友禪染は元祿時代、加賀染は寛文年間に創始したと推定されてゐるが、琉球紅型は此等より古くから行はれてゐるといはれて居り、友禪には優美の中に一種の弱々しさが付き纏つてゐるが、紅型には單に絢爛といふ外に高雅典麗犯すべからざる氣韻が漂つてゐる。其の圖案は大體に

於て友禪染加賀染とは非常な相違はあるけれども互に相交渉し相影響する所が多い。

伊東博士は「琉球藝術は南島の自然を背景として民族固有の思想と趣味とによつて之を處理してゐる。琉球紅型は其の表現が純眞無垢で悠暢寛濶の氣分に充ち、其の色彩の明快妍麗にして雅趣莊重の品位に富んでゐるのは其の藝術的價値を一層高からしめる所以である」といつて居られる。兎角此の染織工藝の上乗たる琉球紅型一つを以て見ても、古琉球が南蠻・支那・日本本土等東洋諸國の文明を取入れ、自己の素直な性情を濾化して環境に適した獨特の文化を創造してゐたことを明に實証することが出来る。

紅型は實に琉球の空海の紺碧な色とすべて明るい感じのする南國の自然に最も相應しいもので此の絢爛華麗な紅型を琉球舌龍宮の娘達がつけて城下町を通つてゐた時代は如何にも豪華版であつたらうことは決して想像するに難くはない。

偕て紅即ち醒臙脂は昔から非常に高價な材料であつた丈けに其の染賃も高く、一ヶ月三反染めれば職工を置いて一軒の染屋が食へたといふから並大抵ではなかつた。しかも結婚や御祝の席には婦人は之をうち掛として羽織らなければ出られなかつたので、結婚を控へた士族の家では三年

前より紅型禮服の仕立に腐心してゐたと言傳へてゐる。

是れ程の郷土郷術が從來認識せられず其の上明治になつて輸入品たる醒臙脂の質が漸次粗悪になつたのや、時勢の變化と共に何物も郷土物より本土移入品がよいやうな偏見を持つた爲め何時の間にか流石の紅型も漸次減んで今は殆んど藍型染のみ残つた形になつてゐる。十數年前啓明會が中央に於て琉球藝術の展覽會を開いて以來紅型の眞價が認識せられ、壓倒的人氣を博して續々縣外へ流出し、今や此の寵兒も落日の感を催さしめるが、最近亦此の手法を復活しつゝある技術者もある。

七二、琉球國劇の創始

琉球では五百五十年から明國と交通しあらゆる文物を移入すると共に又國主即位の大典には一代に一回明・清二朝相續いて彼國の勅使が渡來する例になつてゐたので其の一行滯留期間の間之を歡待すべくいろいろの方法が講じられたであらう。又本土からも折々珍客が見え殊に慶長此の方は薩摩の奉行が那覇に駐在してゐたので此の賓客を接待するためには主に茶の湯や謡曲お能

の會や乗馬・弓術といったやうな日本藝能や娛樂なども行はれてゐたらしい。

さうした機會には自然郷土固有のシノグ・臼太鼓・盆踊等のお神樂風な踊や、綱引・爬龍船競漕といったやうな様々な餘興娛樂なども行はれてゐたであらう。處が今より二百年ばかり前首里の錚々たる士族で傑出した藝道の天才が現はれた。彼は玉城朝薫といひ（唐名向受祐）尙王家の支流の門閥の出で少年時代より屢々樂童子として或は慶賀使或は謝恩使の隨員と江戸往來した人で日本文學や藝能に造詣深くかねて歌舞音樂の綜合的素養があつたのでかつて島津太守公の前で「軒端梅」を舞つたことがある。

彼は琉球古事を基として之に謡曲を參酌して始めて韻文の琉球劇曲を創作した。

彼の作は五番と稱し銘苅子（羽衣）執心鐘入（道成寺）二童敵討（小袖會我）女物狂（櫻川）の五組であつた。

城中では踊奉行が任命され音樂家も考試の上採用し舞踊者は士族名門の子弟中教養氣品ある者を選抜し、數年みつちり御稽古を積ませていよ／＼本舞台に出演させることにした。

是れ即ち琉球國劇の濫觴である。以來慶應三年尙泰王の即位の時迄之を冠船踊と稱へ、首里城

正殿と北殿との間に舞台を設けて演出されるのであつたが、選抜された若者達は前々回冠船踊出演者の老人を大師匠となし、又前回出演者を中師匠として凡そ三ヶ年位練習を積んだとのことである。

随つて琉球古典舞踊は勿論俗間や花柳界の所作とは違ひ舞踊である。儀式の延長といつた高尚上品なもので、徳川中期の舞踊の型や服飾が取入れられたものである。

七三、優雅な琉球古典舞踊

琉球舞踊には、老人踊・若衆踊（少年）・二才踊（青年）・女踊等があり、踊や劇の外に狂言といふのもある。茲に代表的な舞踊數番に就いて解説を試みることにする。

一、かぎやで風（一に御前風といふ）

（歌） 今日の誇らしきは何にぎやかな警る

蕾で居る花の露行逢た如

（大意） 今日の嬉しい誇らしいことはまあ何に警へようか、蕾んで居る花が露に行逢うて開

いた如く。

之は三百七八十年前尙元王即位の時、王位繼承問題が片付いた時、義臣大新城親方安基の詠んだ歌で、琉球の國歌とも稱すべく、王の御前又は祝の席にて大抵最初に唱ふ例となつてゐる。踊は元來老人が扇子をもつて踊るのであるが、今では略式に振袖姿の若衆が扇子舞をしてゐる。

二、上り口説

之は二才踊のうちで、黒紋付姿に脚絆をつけた青年の踊である。首里王府の使者が薩摩に至る迄の道行の歌で、先づ御城元を出發し、観音堂に參詣して海上平安を祈願し、數多官民に見送られて解纜し、道の島々（七島）を左手に見渡しつゝやがて薩摩富士即ち開聞岳の雄姿を仰ぎ、櫻島を右に眺めて百二都城に安着する道行を詠んだ上り口説に振付した扇子舞である。

一、旅の出で立観音堂、千手観音伏し拜み、黄金酌とて立別る

二、袖にふる露おし拂ひ、大道松原歩みゆく、行けば八幡崇元寺

三、美榮地高橋打ち渡で、袖を連ねて諸人の、行くも歸るも中の橋

四、沖宮の側まで親子兄弟、連れて別ゆる旅衣、袖と袖とに露涙

- 五、船のとも綱とく／＼と、船子勇みて眞帆引けば、風やまともに午未
 六、又もめぐり逢ふ御縁とて、招く扇や三重城、ザンバ岬も後に見て
 七、伊平屋渡立つ波おしそへて、道の島々見渡せば、七島渡中も灘安く
 八、立つる煙は硫黄ヶ島、佐田の岬もはい並らで、エイ あれに見ゆるは御開聞、富士に見
 違ふ櫻島

三、女踊（花笠踊又は四ツ竹踊）

冠船踊中の女踊は「伊野波節」又は「諸鈍節」に踊るのが本筋で、此の二つは琉球古典舞踊中の雙壁と稱すべきものであるが、之を本格的にやれる人は少なく、爲に普通は「花笠踊」又は「四ツ竹踊」と稱するものを以て代へてゐる。

花笠踊は絢爛な大柄模様の琉球紅型を纏ひ、華奢な花笠を目深に被り、四ツ竹を打鳴らしつゝ、如何にも優艶な姿で踊つてゐる。南國情緒最も濃やかにして観客を魅惑すること百パーセントである。

其他女雑踊には総掛踊、南嶽節、濱千鳥等があり、二才踊には前の濱節、揚作田節、湊くり節

萬歳などきび／＼したものが多く、又新派と稱すべき鳩間節や男女組合せの天川踊、松竹梅など面白いのがある。

七四、女護ヶ島の話

與那國島といつても知らない人は多からうが、女護ヶ島といふ異名はよく人口に膾炙してゐる。一體何處だらう？如何にも海南琉球の何處かにありさうな名ではある。それは台灣が我國の版圖にならなかつた以前日本の領土中最西南の島で、高い所へ登ると高砂の山が見えるといふから大抵想像がつくであらう。

女護ヶ島と呼ぶからといつても別に女ばかり住んでゐるわけではなく、人口は男女相配してゐるのである。然らば何が故にさういふ名がついたか？

今は昔のこと、此の與那國島では船が着くと島の娘たちが濱邊に打集ひ、銘々持つて來たアダン葉の草履を並べ、其の草履をはいた人を自分の大切な御客としてかしづくのであつたといふ。之は與那國島を代表すべき話として語り傳へてゐるのであるが、現在の島人に訊すと、肯定して

呉れる人は一人もない。勿論現存せる事實ではないのである。しかし年に何回しか船の通はなかつた此の島では入船といつたら島を擧げてのどよめき、今でさへ船が見えると島人は用がなくても濱邊へ出迎へる気分があるから、さうした情趣が交通不便なりしその昔あつたやうな氣がする。たとへ草履は並べないにしても島へ上陸する人はとりも直さず大切な島の客人であり、船と人によつて島の文化は齎らされるのであるから之を歡び迎へるのは人情の自然であり、島人の義務である。

試みに明治二十六年來縣した笹森儀助翁の「南島探險」を見ると、

此の島の婦人、色白く且懇切多情なり、若し美人の心中に副ふものあれば滞在在中其の人に常侍して歡待す……

とあるけれども文化の急激に進歩する今の時勢、最早さうした風習が影も留めてゐないのは當然である。

島は面積二方里周圍七里に過ぎないが中央には海拔七百五十呎の與那國富士等が聳え、島全體が翠綠の中に包まれ水が豊富である。九州の南端鹿兒島を距ること六百八十哩、石垣港より四十

二哩であるが台灣との間は僅に四十哩の帶水を以て煙波相望んでゐる。人口四千、明治四十一年西表間切から分立して與那國村となつたのである。

西表島とは違ひマラリヤのない無病地で風土人に適してゐる。此の島にはカイダーズと稱する象形文字や結繩、與那國手拭など民俗資料が豊富であり、屋島墓・大和墓といつて平家の遺跡と稱する墓もある。悲曲與那國しよんがね節即ち「かのしま節」や、人頭税に泣く「なかなん節」など幾多の南國的民謡がある。就中しよんがね節は別離の情切々として人の肺腑を刺すものがある。其の大意を譯すると、

もう之でお別れかと思ふと持つ盃も涙の泡が盛つて飲むことさへ出来ぬ。御嶽の前で言遣された貴方のお言葉、濱邊で交したその御言葉。再び戻る時迄他所へは嫁かすに待つてゐてお呉れ。どうぞ妾も一緒に乗せて行つて下さい、一緒に連れて行つて下さい。

一緒に連れて行きたきは山々なれど、船は大事な御用物が満載して隙間もない。それなら屋形の上でもよい、艫の上でもよいから乗せて行つて頂戴。何處にも乗れる席がないなら、せめて貴方の懷にでも入れて行つて下さい。

さういふ中に傳馬が急ぐ。泪ながらのお別れ。片帆あがれば片眼に涙、
 双帆もうほあがれば双眼もうしの
 涙。屋手久岬の果て迄は乙女に送られて、沖へ乗出せば只風頼み……

七五、南島の馬と日本犬

昭和十五年宮古島産の小馬が、皇太子殿下御乗用として御買上の光榮に浴したので一躍宮古馬の名聲が帝都で高くなり、其後一種の流行みたやうに各地から注文が来るやうになつた。

宮古・八重山の馬は沖繩本島の馬よりも更に小型で且つ極めて従順であるから御婦人用や小兒用として最も相應はしくそれに飼料も少くて済むから誠に手軽に飼育せられるといふ特長がある。偕て那覇の土地を初めて踏む人は沖繩馬の體軀倭小なるに一驚する。成る程本土の馬を見馴れてゐる眼には如何にも貧弱で驪馬よりちと大きい位にしか見えぬ。處が非常に強健で粗食と激勞とに堪へ得るから此の位便利で經濟的な馬は尠ないのである。之は純日本馬の原形に近く、今日の日本本土の馬は西洋馬の輸入後馬匹改良の結果所謂雜種又は純粹西洋馬に近い品種に變つたのであることを知つてゐる人は割に尠ない。

文献に依ると、往昔南島は馬の名産地であつたらしく、奈良朝以前天武天皇の八年倭の馬飼部の造連を南島に遣はされたとあり、又五百六十年前中山王察度が明國の招諭を受けて以來尙貞王の十三年迄三百年間馬を貢してゐる事實から推測すれば、以前は南島も駿馬を産したものと想像される。琉球には慶長年間の津堅親方盛則を初めとし乗馬の名人が續出して薩州公から招聘せられ、野國黒毛を始め名馬も多かつた。又球陽察度王四十三年の條に、本部の健堅大親が毎夜穀菜を荒し廻る逸馬を取押へたのを漂流支那人が請うて國へ歸り、皇帝に獻じた所「朕中華に於て未だ斯の如き良馬を見ざる也」と御感賞を蒙り、後この馬の來歴を石碑に刻み琉球に到つて健堅の濱に建てしめたが、潮水奔騰の爲め遂に海中に埋没してしまつたといふ。今も唐人の出發せし港を唐泊と稱し、又馬の荒れ廻りし土地を「駢け原」と呼んでゐる。此等の史實から見ても南島は馬の産地であつたことがわかる。しかし長い間に或は同種間の繁殖が行はれて退化せしと、洋種の移入遅かりしたため今日の如く殊更に倭小なる感じがするであらう。

沖繩犬 今や時勢の推移と共に純粹日本犬は殆んど全國的に其の跡を絶ち、之に代つて洋犬又はその雜種が廣く飼養せらるゝに至つた。此に於て政府當局及び民間有志は今更の如く日本犬の

絶滅に驚き、眉に火がついたやうに津々浦々純粹日本犬を探出して之を保護せんとするの狀態となつた。随つて再々中央より純粹沖繩犬の調査方を照會して來たが、最早純粹の犬は索められな
い有様になつたのは遺憾なことである。沖繩犬は大體本土の日本犬と同種であつたらうと思はれ
るが、二三十年前迄は獵犬として飼養されてゐた。其の特徴は耳が突立つて木の葉の微動にも鋭
敏に之を動かし、尾は巻きあげ、脚高く、身體は左程肥滿せず敏活に活動が出來、主人に對して
は犠牲獻身の氣象に富み、秩序を重んじ、勇敢にして能く主家を守り、怪しきものに對しては容
赦なく咆哮呵責し野猪を斃すなど全く日本固有精神に依つて訓練されてゐるかの觀があつた。其
の絶滅は洵に惜みても餘りあることといふべきである。

先年那覇郊外崎樋川貝塚より發掘された犬骨は京都帝大三宅宗悅氏調査の結果、日本石器時代
家犬中の^{ウツク}坪犬(小型)であるといふことを發表せられてゐる。(昭和七、人類學雜誌四七ノ一〇)
以上南島の馬と犬とに就いて述べたのであるが、かうした観点から考察すると、三宅氏が奄美
大島の人種に就いて發表して居られるやうに却つて南島人の血液が日本原人のそれに近いのでは
あるまいか。

七六、ペルリ提督と琉米條約

文化文政の頃より和・英・佛・米等の船艦屢々琉球に來つて通商貿易を要請したが、鎖國時代
の事とて容易に許諾しなかつた。けれども彼等は交易を強要し、或は宣教師を留めて日本の開國
に對する待機の姿勢を執つてゐた。此等外人往來の際、藩廳は或は歌舞音曲を禁じ、或は商家の
門戸を鎖さしめ、市内恰も諒闇のやうなこともあつた。左の俗歌はよく當時の消息を傳へてゐ
る。

淺ましや浮世 アメはフランスが

上下も共に袖を濡らち(琉歌)

西曆千八百五十二年(嘉永五年)米國政府は、日本へ遠征艦隊派遣に決し、水師提督ペルリを
艦隊司令長官並特命公使に任じた。ペルリは喜望峰印度洋を経て翌年香港に到着し、之より琉球
を経て日本へ赴く手順をとつた。

嘉永六年四月彼は旗艦サキスハンナ號以下數隻を伴つて那覇港外に投錨した。琉球總理官は隨

員を従へて艦を訪問し、ペルリ提督と會見をなした。提督は通商和親を請うたが、琉球は洋中の孤島にて物資に乏しく未だ大國を俟つに堪へず、薪水は之を與ふるも交易の件は之を辭せん、と答へた。其後ペルリは王城を訪問すべき旨申込んで來たので、總理官は書を送り、「小國未だ大國使臣を迎接する設備なく且母后先年外臣登城の際驚愕して病を發し猶ほ全治せず、依つて登城を見合されたい」と懇請したが、提督之に關せず却つて示威運動を試みるべく旗鼓堂々進軍して首里へ上つた。

總理官等入城を拒まうとしたが肯んぜず、米國々歌を吹奏して城門へ押寄せた。一行は城門に面して捧げ銃の禮を行ひ、ヘールコロンビヤ奏樂の中に提督は部將を隨へて入城した。總理官は之を北殿に案内して接見した。提督は先づ國王及母后の安否を伺ひ、醫藥其他所用の物品を調達せん事を傳へて今後の和親を請ひ、本艦は一兩日の後出港し、十日後再び寄港すべし、其時總理官以下を艦上に迎へて饗應せむ、といつた。約一時間の後總理官は起つて一行を其の自邸に案内せんことを請ひ、提督亦之を快諾した。自邸とは大美御殿ウツミと稱する王家の別邸であつた。かねて準備せる十二品の盛膳を供したるに一行大満足の意を表し、其の禮儀に通じたるを賞讃した。か

くて饗宴半ばにして提督は起つて琉球國人民の繁榮と、琉米和親の爲め乾盃し、總理官亦提督の健康を祝して乾盃した。此日提督は種々の進物を國王、總理官、布政官及び那覇官へ贈り五月三日、米艦二隻小笠原へ出發した。

五月二十六日提督は浦賀に至り、米國大統領フィルモアの國書を上りて通交の許可を要請した。幕府其の旨を朝廷に具申し、且諸侯の意見を徴して明年回答すべしと答へたので、ペルリ之を諾し艦隊を率ゐて那覇へ歸航した。其の間琉球滯留中の米國士官は那覇官及板良敷通譯を介して

- 一、天久あひくの聖現寺を一年間賃借すること
 - 二、貯炭所を設くること
 - 三、市場を設けて自由に交易すること
 - 四、琉球偵吏の追跡を見合すること
- 等數件を要求せる提督の書類を提出した。

かくて數日の後提督は回答を促した。總理官は言を左右にして極力謝絶したが、提督悉く之を理由なきものとして斥けたので琉球側は遂に其の要求を承諾すべき旨を答へた。

十二月二十三日提督は又軍艦三隻を率ゐて來港し幕府の回答を聽くべく江戸へ向つて發航した。安政元年米人亦通商條約の締結を迫り、琉球政府は百方辨疏して之を拒絶したが及ばず、遂に六月十七日公見して調印を終へた。是れ即ち「琉米條約」である。

- 一、自今米國人來琉の時は好意を以て取扱ひ要求する物品は官民共相當の代價にて賣渡すこと
- 一、米國船何れの港に來泊するも相當代價にて薪水を供給すること
- 一、米國船琉球管下の屬島にて難破する時は其の生命財産を救助すること
- 一、米國人琉球海岸に上陸し島内遊歩の時尾行又は迫害せざること、但不法行爲ある時は琉球官之を捕縛して船長に引渡すこと
- 一、泊村にある米人墓地を荒廢せしめざること
- 一、琉球政府は沖合に現はれたる船舶に水先案内を附して往復共案内すること、但案内人に五弗を支拂はしむ
- 一、米國船那覇投錨の際は薪一千觔、及び水三〇ガロン入の樽六個につき三千六百貫文の割合にて船へ供給すること

右條約は英文漢文兩様に認め、那覇公館に於て米國全權使節ペルリと琉球攝政尙宏勳（與那城按司朝紀）勘定座役人馬良才（棚原親方）に依つて調印せられた。

かくてペルリは嘉永六年四月來琉以來一年有餘にして其の使命を果し、安政元年六月艦隊を率ゐて退去した。

七七、波上の眼鏡ベッテルハイム

弘化三年（西曆一千八百四十六年）五月二日一隻の英國船が那覇港外に投錨し、琉球と通商せんことを請うたが諾せず、爰に於て英船は強ひて醫學博士にして宣教師たるベッテルハイム夫妻及其男女各一名と清國人二名を留めて去つた。琉球藩は止むを得ず之を波上護國寺に置き小吏を配して監視せしめた。

彼は之より九年の久しき此の孤島に逗留してすべての不自由を忍び、有ゆる迫害に堪へて布教施藥・診療・種痘の傳授等に盡し、島民から「波上の眼鏡」又は洋犬を連れて歩くので「犬眼鏡」の綽名を以て親まれてゐたが、キリスト教禁壓時代のこととて十分なる効果を擧げることが出來

なかつた。茲に博士の略歴及び事蹟の一端を述べることにする。

彼は本名をベルナルド・エアン・ベツテルハイムといひ、西歴一千八百十一年六月、匈牙利ブレスブルヒ（現チエッコ・スロヴァキア）に生れ、千八百三十六年伊太利パデア大學より醫學博士を授けられ、埃及軍艦の軍醫長、土耳其陸軍聯隊軍醫長等を勤めたが、後猶太教より基督教に改宗し一人を醫するよりも萬人を醫するの大なるを悟るや、倫敦に渡りて基督教を修め、有名なりヴィングストン（阿弗利加布教兼探検家）と同窓の友となり、英國婦人を娶り、全國海軍傳道局より他日日本傳道を開始するの豫備として琉球に於て言語研究及び布教をなすべく、千八百四十五年九月帆船にて英國出帆、翌年五月二日（舊四月六日）三十五歳の時那覇へ上陸したのである。

博士は波上護國寺に禁錮同様の生活を續け、琉球官憲より嚴しい監視を受けてゐたが、信仰鞏固にして僻易することなく琉球語の研究を進めつゝ、島民の爲めに施療及び説教をなして倦む所を知らなかつた。彼が路傍説教をなし戸別訪問をなすや薩吏及び琉球官吏は終日尾行して人民に警告し、或は往來を遠ざけしめ、或は門戸を鎖さしめて之を避けさせた。其の貧民に救恤し、或は病人に施藥する時は役人必らず之を押收するを常としてゐた。

ベツテルハイムの夫人は、此の邊鄙なりし島に在りて子女の養育をなしながら、堅忍克く内助の功を重ね、常に相携へて布教に従事してゐたが、或時の如きは路傍説教の際瓦石を投ぜられたこともあつた。斯かる困苦の中にも博士は琉球語を以て四福音書の翻譯を大成し、之を上海に於て上梓、廣く頒布して布教の一助たらしめようと企てた。

一八五二年（嘉永五年）九月十二日博士が首里の布教先より歸院して發熱した時の如き、薩吏等密かに令を三司官に傳へ、繪師をしてベ氏の肖像を描かしめ、護國寺の僧をして調伏（マジナヒ）の秘法を修めさせたが寸效だになく、病は直に快癒し、十九日より元氣數倍夫婦相携へて福音の宣傳に邁進したといふ。

嘉永六年四月アメリカ合衆國水師提督ベルリの率ゐる軍艦が那覇港外に現はれた時彼は先づ英國國旗を掲揚して歡迎の意を表し且其間に斡旋して琉米條約を締結せしめ、提督より銀製カップを贈られた。彼は琉球語の聖書を淨書して之を印刷に附すべく安政元年米艦に便乗して琉球を去つたが、在米中偶々南北戦争の勃發に遭遇し、イリノイス州義勇軍の軍醫となつて大激戦に参加し、一八七〇年（明治三年）二月五十九歳を以てミゾリー州ブルックス・フィールドに於て逝去した。

琉球政廳は其の滯在中、食物調度大小となく之を官給することにし、島民をして其の救恤治療を受けしめざる方針をとつた。是れ交易を許さざると共に、聊かも外人の恩惠を受けざる外交政策に基づいてゐるのである。それで其の退去に際し、博士の滯留中施した金銭や物品購入費を積立て費用辨償として銀二十二貫三百八十匁餘を差出し、彼の驚き拒むのを聞かずして受取らせたといふ。

千九百二十七年（大正十四年）五月二日博士來琉八十周年に當り、其の偉大なる徳を永遠に記念する爲めに、米國宣教師イー・アール・ブール氏は日本政府の諒解と當地官民の援助とを得て、彼の九年間寓居せし波上護國寺境内に堂々たる一個の記念碑を建立し、其の中に彼の故國匈牙利より琉球・合衆國迄生涯經由せし十ヶ國の石を蒐め之に國名を勒して箴めてある（本書卷末那覇市見物の項参照）

昭和十二年四月博士令孫ベス・ベッテルハイム・プラット夫人は偉大なる祖父の足跡を訪ねて來縣することになり、かねて聯絡の勞をとりし著者は之を神戸埠頭に迎へ、四月二十七日那覇着五月二日波上記念碑前に於て官民協力の下に盛大なる九十年式典を舉行した。

七八、獨逸皇帝建立の謝恩碑

宮古島漲水埠頭に、珍らしくも獨逸皇帝ウイルヘルム一世陛下の建立せしめられた國際的記念碑が立つてゐる。是こそは島民博愛慈善の功績を永遠不朽に傳へてゐるのである。

時は一千八百七十三年（明治六年七月）獨逸國商船エル・ヨット・ロベルトソン號が獨逸人七名、全婦人一名、支那人二名を同船せしめ、福州を出航して南方諸國へ航海の途中舊六月十五日洋上に颶風に襲はれマスト二本を失ひ、獨逸人二名はそのため壓死し、船は狂亂せる激浪の中に木の葉の如く翻弄せられ、宮古島下地村宮國の東岸十町餘の暗礁に乗上げて仕舞つた。

其の頃琉球藩では津々浦々に「遠見番」といふ司を置いて海舟の見張をさせてゐたが、番人は夕方此の難破船を發見し、直ちに之を藏元（島廳）へ通報した。在番役板良敷は部下役人二名、醫師一名を伴つて宮國海岸へ駆けつけ、島民を指揮して救助に乗出させたが、風波荒くして近づくことが出來ず其の日は暮れてしまつた。人々は施すべき術もなく、只沖を案じながら遠近の浦に篝火を焚いて夜通し警戒に努めたのであつた。

翌日夜がほのくくと明け初めた頃沖を見ると船體は破損してしまひ、乗組の人々は之に縋り付き、長い布片を振つて一所懸命に救助を求めてゐた。島民等は二隻の刳舟に乗り激浪の中に危険を冒して難破船まで漕付け、彼等八名を引取つて、宮國の紡績場（貢納上布の共同紡績場）へ伴ひ、粥よ薬よと懇切に介抱し、やがて在番所へ連行して世話をなした。

初め言語不通のため何國の人なるやも知らなかつたが、萬國旗を取出して見せた結果漸く獨逸人たることが判明した。島の役人達は島民に命じて彼等の荷物・衣裳・銀箱・望遠鏡等を陸揚げさせたが、全長四十米、幅十二米、銅板張の彼等の帆船は荒れ狂ふ風濤のために破損して放棄するの止むなきに至つた。

遭難者は留まること月餘、懐郷の念堪へ難きものの如く、次第に健康も勝れず食事も進まざる状態となつた。宮古詰役人は琉球政廳に對し船舶給與の件を交渉したが埒があかず只再在時を過すのみであつた。此に於て在番役は自己の權限を以て沖繩本島より歸帆せる官船一艘を彼等に附與し而して歸國せしむることにした。加之薪炭・用水・食糧等及び羅針盤などを與へ、盛大なる別離の宴を催してやつた。外人達は涙を流して島民の純情に感激し且別れを惜んだ。出立の日は

二艘の刳舟を水先案内として沖合遠く迄送らせたが、此日島民は浦を埋めて立錐の餘地なき程に増集し帆影の没するまで心からの見送りをなした。

此の美談は彼等の歸國後やがて獨逸皇帝ウイルヘルム一世陛下の上聞に達し、特に軍艦チクロプ號を派遣して宮古島へ謝恩碑を建立せしむることになつた。明治九年舊二月獨逸軍艦は明治政府の許可を得て藩廳に禮を述べ、藩王・官吏・島役人等へ望遠鏡・金銀時計等を贈り、三月建碑の功を竣へ厦門へ向けて出發した。記念碑は表に獨逸文、裏に漢文を勒してある。

昭和十一年十一月十四日宮古郡教育會主催に依り漲水港頭に於て「博愛記念碑六十年記念式」が嚴修せられ、獨逸國代表大使代理トラウツ博士を始め、外務省事務官二見孝平氏其他縣知事代理、平山裁判所長等官民多數臨席盛況を呈した。猶ほ宮國海岸には近衛文麿公の揮毫になる「獨逸商船遭難之地」と題せる記念碑を新に建立し、遭難者慰靈祭及救助現存者崎原翁八十七歳、濱川翁八十二歳、其他遺族の表彰式を舉行し、日獨親善の實をあげた。

七九、日本最初の琉球國勳章

世は未だ御維新にもならぬ徳川最末期、西暦一千八百六十七年（慶應三年）佛國巴里で開かれた国際博覧會の時「薩摩琉球國勳章」といふのを造つて佛國皇帝ナポレオン三世陛下並文武官へ贈り、世界の國々を驚倒させたばかりでなく、幕府の統治權を侵害して物議を惹起したといふ話の種子なのである。

抑も島津氏は慶長十四年琉球を征服したけれど、別に體面を傷めることなく、其の特殊的立場を巧みに利用して従來の如く通商を営ましめ、幕府が長崎に於て貿易してゐるが如く隠然琉球の名を藉りて支那貿易をさせてゐたのである。

抑も此の勳章問題の起りを探究するに、慶應三年四月一日より巴里に於て大博覧會を催すことになり、かねて我國へも參加を求めて來たのであつた。

茲に於て幕府は慶應二年四月各藩に令して國產の出品を懲憑する所あり、外國奉行柴田日向守等を博覧會掛に任じて着々準備に取りかかつた。幕府の出品は陶器・漆器・銅器・武器・船具・煙草・鑛物・書籍等凡そ二百箱、原價四萬七千兩と江戸町人の出品百五六十箱とで各藩の出品は薩摩藩の五百餘箱と佐賀藩の五百餘箱の外他藩のは全然なかつた。

すべて出品に就いては目錄を提出して幕府の許可を受け現物は便宜上長崎へ廻付し長崎奉行が點檢して外船に積ませることになつてゐたが、どうしたことか薩摩は出品物の半分を英船に托して巴里へ送り、目錄も切迫して届出の時日がないとの理由で巴里に於て點檢を受けたいと願出た。處が薩藩では巴里に於て、兵器購入等のため竊かに渡歐させた藩士新納刑部・岩下佐次右衛門の二人をして處理せしめ、幕府より出張せる柴田日向守及び其の委囑せる佛人の手を経ず、寧ろそれとは反對に巴里貴族モンブラン伯爵と結び、之を特別委員として獨立行動をとり、伯より博覧會總裁に書を贈つて「薩摩侯は日本の大諸侯たると共に琉球國王である。故に薩摩侯としては獨立した琉球國王としての使節を巴里に差遣したのである」と主張したのであつた。博覧會事務局も之を承認し、陳列會場も日本國から切離して、暹羅・支那・交趾と並べて獨立した「薩摩琉球國」の一區を設け「丸に十字」の島津氏定紋旗を掲揚し、開場式の當日には「琉球諸島王使節」と名乗つて薩摩藩士岩下佐次右衛門が參列した。

問題の勳章は即ち開場式の當日、岩下の手から佛國皇帝及び文武官へ贈つたのである。巴里の

各新聞は筆を揃へて此の事を特筆報道したが、幕府吏柴田日向守は只黙過してゐるに過ぎなかつた。然るに此處へ博覽會總裁として徳川民部大輔昭武公子（慶喜公の弟にして後の水戸藩主當時十四歳）と新任駐佛公使向山隼人正榮の一行が佛國に着き、幕府に於ては勳章を制定したことさへないのに、薩藩が敢て之をなしてゐるのは明かに幕府の主權侵害だといふことになり、此の重大事件に關し、向山公使等をして岩下藩士及び佛國官吏と會見して其の不都合を詰責し、同時に薩藩の出品物も日本國內に編入すべしと主張したが何等の効果もなく、薩摩琉球國の出品は丸に十字の旗の下に依然として一國の資格を以つて陳列されてあつた。外國新聞は一齋に幕府の統制力なさを嘲笑した。其の原因は國際的及び種々の方面よりデリケートな問題が絡んでゐるけれども一は亦琉球國の主權所在に就いて佛人は容易に幕府の申立を諒解しなかつたのである。之に依つて歐洲人が今まで名も知らなかつた薩摩侯・琉球國の名は一躍世界列國の一に伍することになつた（因みに該勳章は陸軍徽章の如き星形を深紅色金線七寶にして中央に白色七寶で轡の島津氏定紋をつけ、星脚の間に金色で「薩摩琉球國」の五字を飾付けた見事なものである。實物鹿兒島尙古集成館陳列）

八〇、ナポレオンを驚かした琉球

地中海のコルシカ島より出でて一躍フランスの帝位に登つたナポレオン・ボナパルトは一時歐洲大陸を席捲したが、オーターローの激戦で一敗地に塗れ、一八一五年遂にアフリカ西南洋中の一孤島セントヘレナに流され、悶々として憂鬱の日を送つてゐた。

翌一八一六年東洋探検より英國への歸途に就いたペーシルホールは途中セントヘレナに寄港して、謫居中の奈翁に會見し、琉球のことに就いて、

「武器のない珍しい國が存在してゐる」

と語つた。處が百世の英傑ナポレオンは忽ち不審の眉を顰めて曰く、

「汝のいふ武器とは大砲のことで、小銃はあるだらう」

といつた。否「之もなし」と答へしに、

「然らば投槍の類はあらう」

と問うた。「イヤ之もない」といひしに、

「然らば弓矢の類は？」「短刀は？」

と、疊みかへした。「イヤ皆ない」と答へたところ、彼は拳を固め顔はして聲高らかに、

「然らば、武器がなければ何を以て戦争するか」

と詰問した「予の見る所にては戦争もなさざる様にて内憂外患も亦ないやうに見受けた」と答へしに、ナポレオンは冷笑して、

「太陽の照らす所にて戦争をなさざる國があるとは、さても不思議である」

と、いつたといふ。それからベールシルホールは更に琉球の貨幣、農業等のことを語つた所、奈翁は、琉球の牛馬使用及び灌漑收穫の方法、氣候、建築、船舶等のことをも尋ね、次に

「琉球人は外國のことを知り居るや」

と、問はれたので「支那と日本の外は知らず」と答へしに、再び

「歐羅巴のことは？」

と反問されたので「歐羅巴のことも知らず、勿論陛下の事を知らず」といひしに、ナポレオンは呵々大笑したといふ。

八一、和歌に堪能な維新慶賀使

慶應三年正月 明治天皇踐祚したまひ、十月將軍徳川慶喜大政を奉還して皇政古へに復し即ち明治維新となつた。明治四年に至り列藩諸侯版籍を奉還せしに依り七月廢藩置縣の大詔は渙發せられ、其の結果琉球も島津氏の羈絆を脱した。

五年七月國主尙泰は維新慶賀使として王叔尙健（伊江王子朝健、現男爵の曾祖父）を正使、三司官きわ官わ朝保（唐名尙有恒）を副使として東京へ遣はした。一行凡そ三十名汽船に乗じて薩摩に赴き、九月亦船路より東京へ着いた。朝廷之を寵遇し華族毛利氏の邸宅をあけて宿舎に充て、官費を以て盛膳を賜ひ、屢々景勝の地へ招宴款待せられ一同天恩の優渥なるに感激せざるはなかつた。九月十四日使臣等表及び方物を奉じて入謁した。表に云ふ、

恭シク惟ミルニ皇上登極以來乾綱始メテ張り庶政一新黎庶皇恩ニ浴シ、歡欣鼓舞セサルナシ、尙泰盛事ヲ聞キ權抃ノ至リニ勝ヘス今正使尙健副使尙有恒賛議官尙維新ヲ遣シ謹ンテ朝賀ノ禮ヲ修メ且方物ヲ貢ス 伏シテ奏聞ヲ請フ

明治五年壬申七月十九日

琉球 尙泰謹奏

同日皇后陛下へも表及び方物を奉獻 兩陛下に對し奉り朝覲拜賀の禮を修めた。

此日、詔文を賜ひ、尙泰を封じて琉球藩王と爲し、華族に列せしめられ、藩王及び夫人並使者へ御下賜品があつた。

九月十八日 聖上陛下御歌會を吹上御苑内瀧見の茶亭に催させ給ひ、陪席には有栖川宮を始め奉り、華胄卿相凡そ二十餘名、薩摩の歌人八田知紀點者の役を拜した。副使宜灣朝保は「紅葉如醉」の御即題で

汲みかはすまとゐの外の紅葉まで

酔ひの盛りと見ゆる今日かな

と詠じ、更に「水石契久」の御宿題に對しては

動きなき御代をこゝろの岩か根に

かけて絶えせぬ瀧の白糸

と詠進して寂感を蒙り、御製の宸筆を始め奉り、當日詠進の歌草悉く朝保に賜つたといふ。

斯くて琉球藩融通の爲め金參萬圓を下賜せられ、使臣三名へは烏帽子並素襖直垂を賜はり、十月三日天長の佳辰に當れるを以て參朝を許され、後改めて參内御暇乞をなして歸藩することになつた。之より政府は着々琉球廢藩處分の工作を進めることになつたが、當時琉球には日本思想と支那思想との二大勢力があり、宜灣は歸國後反對黨の迫害に遇ひて職を辭し、隱退して閑雲野鶴を友とし、詩歌に思を遣つてゐたが、明治九年遂に憂悶の中に逝いた。

八一、一視同仁皇恩に均霑す

琉球は古くから大八洲の一部であつたことは争ふべからざる事實であるが、明國通交以來日支兩屬の觀を呈してゐたので、明治維新後も對支關係上其の處分は可成り大きな問題であつた。然るに明治四年琉球宮古島民が台灣蕃人に殺害されたことが動機となつて七年台灣征伐を執行するに至つた。

日本政府は表面討蕃の交渉を開始し、之を以て琉球處分の伏線と爲してゐたのであるが、清國政府は之を悟らず「蕃人は化外の民なれば敢へて關する所でない」と其の責任を回避し、琉球の

所管に就いては一語も言及することがなかつた。若し此の時清國が「琉球は五百年來支那の領土で今回の遭難事件は結局自國版圖内の事件故敢へて日本の容喙を要せず」とでも高飛車に出たとしたら琉球處分問題も同時に勃發して事態頗る紛糾したであらう。

征台後日本政府は琉球處分急進主義を執り、明治八年、三司官等の上京を命じ、内務大丞松田道之は數回面謁して太政大臣の内命を傳達し着々廢藩置縣の工作を進めた。之より熊本鎮台分遣隊を琉球へ派遣することとなり、松田道之等總員七十餘名來島し、清國交通の斷絶、冊封の禁止等について嚴命を下した。

琉球官吏は種々の事情を具陳して之を拒絶すべく嘆願に努めたが、松田處分官は諄々として之を説き伏せ斷々乎として假借する所なく、琉吏も彼の明敏直截なるには全く齒が立たなかつた。當時藩内は恰も鼎の湧くが如く黒（支那派）白（日本派）に分裂して上下動搖し重苦しい氣分に包まれてゐた。

明治十一年に至り清國は琉球問題に關し吾が寺島外務卿に書を寄せて抗議する所あり、後更に偶々來遊中の米國前大統領グラント將軍に調停方を依頼し、事態漸く悪化せんとし、宮古八重山

割讓問題まで飛出したが遂に事なきを得、明治十二年三月十一日太政大臣三條實美の名を以て、廢藩置縣を仰せ出され、同時に沖繩縣を置き、内務省書記官木梨精一郎を縣令心得に任じた。

猶ほ同日附を以て舊藩王尙泰「御用有之至急出京可致候事」といふ命令書を交付せられ、尙弼（今歸仁王子）尙健（伊江王子）は特旨を以て華族に列せられた。尙泰は從三位麿香間伺候仰付けられ、麴町區富士見町に邸宅を賜はり後加賀百萬石の前田氏と同格の侯爵に列せられた。

此に於て久しく南陔に弧立してゐた琉球も初めて桃源の夢より醒めて一視同仁皇恩に均霑するに至つた。宜灣朝保の左の一詠は能く縣民の心情を吐露せるものといふべきである。

古への人にまさりて嬉しきは

此の大御代にあへるなりけり

八三、バルチック艦隊を通報した宮古五勇士

日露戦争の勝敗は明治三十八年五月二十八日の日本海々戦によつて決定された。露國バルチック艦隊は總勢三十八隻、早きは前年九月本國を發し旅順・浦潮の東洋艦隊と聯合して日本の海軍

を全滅させるといふ雄圖を抱き刻々に迫つて來た。偕て此の大艦隊は朝鮮海峽から浦潮へ向ふか？さりとも津輕海峽を通るのか？將又千島海峽を迂廻するののか？全く豫測に難つた。苟且にも武運拙かつたら帝國の安危はどうなるであらう？國民は只々不安と壓迫とを感じつゝ、日一日を過ごしてゐた。

折しも明治三十八年五月二十三日沖繩那覇港より貨物を塔載して宮古島へ航行中の山原船が、海上朝霧の中に黒煙を吐いて通過する艦群を發見した。すはやバルチック艦隊だと驚愕仰天してゐると二隻の軍艦が山原船目がけて迫つて來た。愈々捕虜にされるに違ひないと狼狽してゐたが、彼等は山原船の形や旗印などを見て支那のチャンクとも思つたのであらう其の儘引返してしまつた。

虎口を逃れた舟子達は安堵の胸を撫で下し、翌二十五日朝宮古島漲水港に投錨するや船頭與濱牛（粟國島出身二十九歳）は直ちに宮古警察署へ其の旨を急報した。署長内田輔松氏は之を島司橋口軍六氏に通知して協議することになつた。

當時宮古島には電信の設備がないので鳩首凝議の結果即日漁夫數名を選抜し列舟を以て八重山

電信局より夫々上級官廳へ急電を發せしむることに決定した。此の重大使命を托されたのが左記久松の五勇士である。

字區長（總指揮）

垣花 善（當時三十歳今は故人）

小字松原

垣花 清（當時二十三歳善の弟）

〃

與那覇浦（當時二十六歳）

〃

與那覇松（當時二十四歳浦の弟）

小字久貝

與那覇浦（當時二十二歳同姓同名なるも他人）

橋口宮古島司から命令を受けた一行は準備を整へ愈々五月二十六日夜も未だ全く明けやらぬ午前五時鎮守の神森に祈願を籠めて大泊の濱を勇ましく出發、漸く前離れの岬で旭日を拜し一心不亂に九十湮の八重山へと漕出した。此日「天氣晴朗なれど浪高し」で、力漕正に十七時間、午後十時石垣島の東海岸へ着いたが、引潮と疲勞の爲め遂に此處に一夜を明かし、翌二十七日未明更に七湮の海岸を迂廻して漸く午前九時石垣港へ上陸し、八重山警察署へ宮古島司の急信を手交して大任を果した。

然るに其の時己に遅く、二十七日午前四時四十九分哨艦信濃丸が「敵艦見ゆ」の通報をなした後であつた。しかし其の結果の如何にせよ、五勇士の犠牲奉公の行爲は一大義舉にして洵に一世の亀鑑とするに足るものがある。

其後元沖繩縣師範學校主事稻垣國三郎氏の「遅かりし一時間」と題する五勇士紹介は五十嵐博士の中等國文教科書に採擇され、之を瞥見した女子學習院教授伴しげ子女史は感激の書信及び物品を贈つて五勇士を勞ふ所があつた。又昭和五年十一月三日（海戦後二十五年）明治佳節に當り沖繩縣知事井野次郎氏は金一封を送つて之を表彰したが更に昭和十年五月日本海々戦三十周年には海軍大臣より奥濱船頭を加へて六名の表彰を行はるゝこととなり、記念の剝舟は宮古郡教育會の發起によつて海軍省へ献納されることになつた。

八四、識名園と名橋眞玉橋

識名園 は尙侯爵の別邸である。規模は大きくないが所謂幽邃閑雅の仙境で眼識の高い人は折角琉球へ參つても此の名苑を見ないと心残りがあるであらういつてゐる。

タクシーを利用すれば簡便であるが、與那原行の輕鐵に乗り、二十分にして一日橋に下車すると左手高台の樹木鬱蒼たる中に四阿が見えてゐるのがそれである。

之は東苑に對して南苑と稱せられ、百四五十年前冊封使欸待のために設けられ、狭い島國にありながら四方何處を見ても海が見えないといふのが其の特徴であつたといふ。

苑内には數百年を経たらんと思はるゝ老松・福木・琉球の名花梯梧樹・榕樹など蒼蔚として板を交へ文字通り靜寂幽雅そのものである。

園は室町時代の庭園法に依つて築造され、心字形の鑑池を中心に奥床しき殿閣があり、中に多くの冊封使の題額が掲げられ、美しき芝生・築山・風雅な八角堂・古風な支那式の石缸・配置よき石燈籠・木石花卉など靜かに影を倒に映し、育徳泉より流れ出る清水は池に湛へ、溢れて飛瀑となり東方へ落下する。

南隅の勸耕臺は往時國王此處に臨みて農を奨められたと傳へ、島尻の大平野を一眸の裡に收め全く大陸的な感じを抱かしめる。昭和十六年文部省は名勝に指定することにした。

琉球第一の名橋 眞玉橋は那覇灣奥の國場川に架けられてある。三聯の大石橋で、琉球の錦帯

橋とも稱すべきである。伊東博士は

その無裝飾で線の運用だけで技巧を現はした處に限りなき妙味がある。此の点は崇元寺の門と同じ精神である。その線の働を観察するに第一に橋の長・廣・高の比例が恰も適當である。三拱の形は半圓に近いが稍扁平で其の曲線が美しくして力がある。拱の空間と壁面との比例も誠に美しく爲めに橋に堅實の觀を與へる。……外貌の秀美と内容の力とを兼備するもの余眞玉橋に於て之を見る。奇を衒ひ、巧を弄し、彫刻傳彩を事として俗眼を欺かんとする建築は此の橋の前に愧死せざるを得ない。

と激賞して居られる。此處は尙眞王時代中山と南山とを連結する唯一の道路に當り、初め木橋二基を架してあつたが、寶永四年石碕に改めた。橋は北を世濟橋・中を世寄橋・南を世持橋と名づけ、南北無名の小碕と共に總稱して眞玉橋と呼んでゐる。

八五、常夏の國の氣候

沖繩縣の氣候は亞熱帶式で、海洋的なるが故に極めて溫和であり、冬も霜雪を見ず、夏は海風

常に吹いて甚だしき炎暑なく、四時草木繁茂して落葉を見ない。

沖繩では毎年夏秋の頃名物の颱風が襲來する。之は南洋方面に發生して北上し、概ね琉球近海で北東に轉回するから年々其の災害を免ることが出來ぬ。勿論農作物の被害もあるけれど、氣候が暖い丈けに復活力が早いには驚く。盛夏の候焼けつく旱天が十數日も續いて灼熱正に堪へ難い時、颱風の通過に依つて暑氣全く一掃せられ百パーセントの涼味が齎らされる。

冬期は北の季節風モンスーンが黒潮と衝突して海波荒く陰鬱の日も尠くないが、年中空の澄み渡つてゐると、海の色が紺碧清澄たのは南國の特徴で、最も魅力を感じる。

一年中の平均氣温は、那覇が二二・二（華氏七二・〇）石垣島二三・二（華氏七三・八）で、之を鹿兒島の一六・七（華氏六二・二）大阪の一五・〇（華氏五九・〇）東京の一三・八（華氏五六・〇）札幌の六・九（華氏四四・四）仁川の一〇・六（華氏五一・一）に比較すると相當な高温であり、台灣恒春の二四・三（華氏七五・七）より聊か低く、小笠原父島の二二・七（華氏七二・九）とは大抵相似てゐる。

一年中最も暑い月は七月で、那覇では二七・九、石垣では二八・三を示し、本土より暑熱が一

月早く来るわけである。測候所創立以來の最高気温は、那覇に於ては三五・五（華氏九五・九）石垣に於ては三五・四（華氏九三・七）にして之を全國最高記録たる新潟の三九・一（華氏一〇二・四）と比べれば遙に低温であり、鹿兒島の九七・〇、大阪神戸の九九・七、熊本の一〇〇・九、山形の一〇〇・二、北海道網走の九六・四、奉天の一〇二・七、台北の九九・五等のいづれよりも低い。是れ海洋によつて緩和されてゐる結果である。

暑氣の期間は割合に長く、三十度以上の気温が四月下旬より十一月上旬迄凡そ二十旬に亘つて頻繁に現はれる。けれども室内は通風さへあれば左程に暑熱を感じない。只湿度の高いために暑いやうな氣がするのと、一日の中暑熱の時間が割合に長くて盛夏は夜間迄續くことが一つの特徴で雨戸を鎖すと蒸熱堪へ難いこともあるから、戸をすかして空氣の流通をはかれば凌ぎよい。

本縣で最低温度の現れるのは二月で、那覇の八度、石垣島の九・八度であつて恰も鹿兒島の五月頃、京都の六月頃に相似てゐる。最低気温は那覇の四・九度、石垣の五・九度で求點以下に降つたことは絶対にない。之を台中の〇・一度、台北の〇・二度に比すれば實に十度餘の高温に屬する。

要するに、本縣の氣候は冬秋はなくて春夏の二季を以て經過するといふも敢へて過言でない。土地の人々は古來、夏冬といふ言葉を使用するので、春秋の感じは餘り持つてゐない程である。さう書いて見ると、本土の方には綿入などは全然入らぬであらうと考へる人もあるが、沖繩とて二月頃は相當寒い日があり、二年一回位降雪がある。風は割合に強く、年平均風速は那覇に於て一秒間五米、石垣では七・一米で、本土の約二倍に相當する。暴風期は大抵七月下旬より九月の二十日前後迄であるが、時偶には十月頃に襲來することもないではない。此の颱風君はマリアナ群島カロリン群島の附近で産聲をあげ、五月頃は印度支那へ、六月には香港方面へ、七月には台灣、宮古、八重山方面より支那大陸へ向ひ、漸次八月九月にかけて沖繩群島を突いて九州、本州方面を訪れる。是れ即ち毎年二十日前後警戒を要する所以である。殊に沖繩は其の進行を轉換せんとする彎曲点に位するさうで、低迷數日に涉ることもある。

台灣及び石垣島近海は低氣壓の誕生地ともいふべき所で、秋冬より春にかけて俗に台灣坊主と稱するものが頻繁に出現する。それで本土では此の有名な石垣島さへ取り除けたら低氣壓は失くなるであらうといふ笑話さへ出る位だが、しかし、それ丈け琉球は本邦氣象上南方の關門で觀測

の重大なる任務を背負うてゐる譯である。

雨量は年總量二千耗を超過し、那覇に於ける年平均は二・一五七耗、石垣は二・二〇七耗で之を鹿兒島の二・一四〇耗、大阪の一・三三七耗、東京の一・五四四耗に比すれば多雨に屬する。一年中の雨天日数は那覇二〇三日で、鹿兒島は一六九日、大阪は一三八日、東京は一四七日、台南は一〇七日、滿洲は僅に七八日に過ぎない。梅雨期は五月下旬より六月中旬で、本土より約一ヶ月早く、本土の霖雨とは聊か趣を異にし、晴降交々臻るのである。

沖繩地方氣象台は昭和七年四月、從來の沖繩測候所を改稱し總工費四十万圓を費して建設したもので中央氣象台及び神戸海洋氣象台を除いては全國有數の設備をなしてゐる。石垣測候所は明治二十九年の創設に係り、氣象國防の第一線にあつて重大使命に任じて居り、又宮古島にも測候所が設立せられてゐる。

八六、飯匙蛇ぶごマングース

沖繩といへばすぐハブを聯想する位餘所では宣傳されてゐる。全く迷惑な話である。沖繩へ行

つたら丸で此處彼處木からぶら下つてゐる位に思つてゐるからたまらない。那覇港へ着いて早々ハブを氣にして足高に跳んでゐた男もあつたとか、笑止千萬なことである。實のところ筆者は琉球に生れて未だ自ら之を發見したことがない。しかも古瓦を漁つたり、動植物を採集したり、名所舊蹟さては古墓調査等夜晝となく島内を跋涉してゐるが未だ一回でも御目見えの光榮に接しない。かうなつては甚だ遺憾の至りともいはいはうか？それ程であるのに一週間やそこ／＼見物に來てそれを怖がるなんて認識不足も甚だしい。

ハブ公とは大體その名稱が氣に食はぬ。しかしそれはヘビの轉訛で、ハ行バ行の二音だから相通じてゐる。そんな詮議はどうでもよいとして、彼は多く石穴の中に棲み、春夏秋冬の夜間ノソリ／＼出る丈で、しかも人を見れば向様から矢の如く遁げる。只彼は逃場を失つて進退谷まつた時クル／＼渦卷をなし雁首をもたげて身構へする。全く正當防衛とでもいはいはうか。たとへ跳んでも自身の長さには達せぬ。況んや進んで人を攻撃するものではない。たとへ萬一やられても今では血清注射で生命をとりとめる。尤も手當がおくられて時間が経過すると困る。

警察でハブの頭を買取るやうになつてから餘程減つて來た。勿論文化と反比例に、所謂開けた

地方には少なく未開拓の土地に多いのは當然である。随つて牧童や薪取など何時も草昧の地に入してゐる人は見付かる機会がある。それはマムシも同様である。夜間の田舎旅行等は照明が必要で「盲蛇におちず」を真似るのはよくない。しかし此處の人はゐないといふ信念で光なしにも通つてゐる。それ程であるのに以前知事官舎に現はれたとか、警察部長官舎に出たとかで評判になつた。那覇あたりでは場末の外には居らぬ。

大抵沖繩へ行つてハブに面接しないのは耻辱だとも思つてゐるのか？イヤ歸つてから話の種子がないと思つてか宣傳材料にハブの知識を仕入れて歸る。そしてそれを實地に見たやうに輪をかけて吹聴する人もある。全く困つたものだ。大體話は珍奇でないと種子にはならぬから誇張があり針小棒大がある。聞く人は割引して然るべしある。

明治四十三年渡瀬博士が印度から名物マングースを持ち渡り、ハブ退治に任すべく那覇附近の野に放つて以來島尻中頭二郡に大部繁殖した。處が農民はそれ以來甘蔗がマングースのために荒されるといつて冤罪を着せてゐる。然るにマン公は肉食獣であつて、其の胃袋を解剖しても農作物は見つからぬ。要するに之はマン公がハブ退治をした結果、ハブの捕食してゐた鼠が以前より

はびこつて間接に甘蔗に對する鼠害が多くなつたといふ理論に到達することを知らないのである。此のマン公とハブ公とを金網張の中へ放り込むと、直ちに戦を開始するのではないが、止むを得ぬ窮極の場合どちらも霹靂の如く敏捷に飛びかゝる。大抵マン公がすばやくハブの首筋に噛みつく、かうなると流石の強者も白い腸を上にしてパツタリと往生を遂げるのである。

八七、沖繩産業總まくり

沖繩島の農村を巡つて見ると、耕地といふ耕地は殆んで主要食糧たる甘藷と換金作物の王座を占むる甘蔗との二大作物でその他の作物は殆んど見當らない位である。那覇を基点として數里以内の區域では餘りに水田も見付からぬ。それもその筈、自給自足經濟の藩政時代には砂糖の如きも今日の如く多量には作つて居らず、藩廳の制限があつて村々の耕作割當が極まつてゐた。

然るに置縣後だん／＼貨幣經濟の時代に推移するにつれて購買物資が多くなり現金を必要とする所から桑田變じて海となつたのではないが、次第に從來の田地を埋めて畑と爲し、米の代りに換金作物の甘蔗を植付けるやうになつたのである。

しかし中頭郡の北部から國頭郡にかけては山林地帯も多いが、又灌漑の便もあり相當昔の儘の田地も残つてゐる。けれども五十七八万の現住人口でお米は僅々十二三万石しかとれず、それに縣民生活程度の向上に伴つて米の需要も多くなり、年額一千六七百万圓の砂糖（分蜜糖共）を賣つて七百万圓の米を買入れてゐる現状である。

昭和十三年度の縣統計に依れば本縣生産總額は凡そ七千万圓で之を内譯にして見ると、

農 産	三千百万圓(四割四分)
工 産	二千七百万圓(三割八分)
畜 産	三百九十万圓(六分)
鑛 産	二百九十万圓(四分)
水 産	二百七十万圓(四分)
林 産	二百七十万圓(四分)
計	六千九百八十万圓(一戸當五六五圓)

といふ事になつて居り、四面環海三百五十里の海岸線と、五十有餘の島々（無人島を除き）を控へて

居りながら漁業は割合に少なく全戸數の七割一分即ち八万七千戸は農家である。それも土地瘠薄狹隘で耕地面積は一戸當り僅に平均七八反、那覇附近では五六反に過ぎず、しかも集約農業、立體農業の域に達せざる爲め温暖の氣候を有しながら生産額も他縣に比し低位にあるを免れない。米、稻作は從來在來種のみで舊態依然として改良進歩の跡も見えなかつたが、昭和四年台灣に於ける米作成功に鑑み、本縣に於ても台灣及他府縣種の栽培を取入れ、二期作を普及して以來成績顯著なるを得て年々増産を見つゝある。

甘蔗、糖業が最重要産業たる關係上其の作付は全耕地の一割五分に當り甘蔗生産高十三億斤に達し、近年大壘種の普及に伴ひ栽培方法に於ても集約化し、長足の進歩を見るに至つた。

蔬菜園藝、花百合、甘藍其他輸出向のものも二三十万圓程度あり總額百四五十万圓の生産はあ

る。
蠶業、本縣は氣候風土の上に天恵多く春夏秋冬桑葉青々としてゐるので最も養蠶に適し、殊に蠶種製造の本場として全國的注目の的となり、養蠶戸數一千五百戸、春秋蠶に於て四十万圓程度の収益は擧げてゐる。

畜産 豚は本場だけに十四万頭、山羊は十二万頭、牛は三万頭、馬は古來名産地で五百五十年此の方向貞王代三百年間支那へ貢物の一になつてゐた。

林業、林野總面積は十三万町歩で全面積の五割三分に當り、氣候溫暖多雨地で樹木の成長率は他府縣の一倍半に及び頗る有利の地位にありながら、大政治家蔡溫の禁戒を破つて濫伐後容易に復活せず、防風林の荒廢と暴風の襲來とによつて被害多く、未だ昔日の繁榮を見ない現状にあるのは惜しみても餘りあることである。

鑛業、鑛産物としては西表島の石炭を筆頭とし、ラサ島の燐鑛、鳥島の硫黄、座間味村の銅など相當な收量がある。國會議事堂等に使用せられた、本部瀬底島及宮古島産のトラパーチンは從來の伊太利産を排撃して聲價を博してゐる。

水産、明治三十四年以來鯉漁業が勃興し年々相當の産額を擧げてゐたが、近年多數の海外遠洋出漁者を出し、南洋方面に活躍するもの多く縣内は稍停頓の状態である。しかし沖繩産鯉は年産八十万圓に過ぎないが其の品質頗る良好で先進府縣産を凌ぎ中央市場に於て好評噴々需要が極めて多い。

工業、工業といつても別に製糖會社の外に大工場が澤山ある譯でないからわかりきつて居るのであるが、工産は二千六百万圓で總産額の三割八分に當り、砂糖は又其の六割を占め、其他泡盛凡そ四百万圓、琉球織物七八十万圓、漆器三十餘万圓になつてゐる。

副業、夏帽子は年額百五十六万圓を産し、重要産業の一となつてゐる。

八八、沖繩名産

移出産業の第一位は砂糖であるけれども、美術工藝品とか、お土産品とかいふ意味から考へると、古來有名な琉球漆器を第一に推すべきである。

漆器 は其の手法他と趣を異にし、堆錦・沈金・螺蚶など珍らしく、氣候風土の關係上、鮮明なる朱色を始め如何なる色彩でも濃艶なる南國氣分が旺盛し、加之圖案技工亦嶄新にしてモダンな製品を創作し、材質の堅牢、價格の低廉なること已に定評があり、近年工業指導所の啓發により一新紀元を劃し、東京大阪其他の都市は勿論遠く巴里・紐育等海外へも進出して大にその聲價を高むるに至つた。漆器は今を距る五百年前已に應永三十四年明の宣宗、柴山を琉球へ遣はし

た時生漆を買はしめたと史上に見えてゐるから當地でも古くより發達したものらしい。慶長十七年には貝摺奉行が設置され、寛永十三年嵌螺法研究の爲め、國人を福州へ派遣した位だから少なくとも三世紀前より青貝摺の如き巧妙華麗なる技術が行はれてゐたのである。轆轤は慶長以前大隅の人鮫島六郎兵衛によつて傳へられ其の結果漆器業に一進歩を來した。

正徳五年（二三七五）首里の人比嘉乘昌初めて堆錦ついきんの法を發明した。之は顔料の中に漆を注いで練り合せ、伸して本塗の上へ更に切張りをなす琉球獨特の手法で溫度及濕度の高いことを條件とするが故に到底他地方の追従すべからざる技術である。

陶器 も其の製法頗る古風で民藝的趣味を如實に表現し、古雅珍奇なるもの多く製品種類亦豊富にして、漆器と共に他府縣への土産品として好適のものである。由來我國陶業の歴史は一體に新らしく、太閤朝鮮征伐の時凱旋に際し、各藩共陶工師を數十人宛擲にして歸り而して其の製法を傳へしめたもので薩摩燒・有田燒等皆その例である。琉球に於ても亦薩州に歸化した高麗陶工師の中三名を聘して陶法を傳授せしめたことになつてゐる。現在の窯場は那覇市壺屋町にあり、近時琉球古典燒と稱する古雅なる製品を産し漸次販路を擴張しつゝある。

泡盛あはじり

沖縄では單に「酒」といつたら泡盛のことである。神社の御神酒みかみも普通泡盛であるが、新來客は日本酒だとばかりにガブツと戴いて目を廻す人もある。泡盛は外來の粉米を原料として蒸溜するので、清酒の醸造とは全然其の方法を一にしない。無色清澄・香氣芳烈にして酒精含有量四・五十%に及び國産ウイスキーの名に背かない。價格低廉なるのみならず芳醇佳味を以て聲譽を博し、近年縣外都市に於ける消費量甚だ多く移出激増の傾向を示してゐる。醸造高凡そ三萬石價格二百數十萬圓、縣外移出凡百萬圓になつてゐる。

首里・那覇には古酒コウシユと稱し二三百年に及ぶものもあり、南蠻甕の用器と共に大に珍重がられてゐる。四百年前冊封使陳侃は其の使録に

王、酒を奉じて勸む。清にして烈なり。暹羅より來ると。之を米奇チキに比すれば、一盞を盡す能はず。予等は但だ之を嘗むるのみ。

と記してある。恐らく其の頃迄琉球の酒は日本式のミキ又は濁酒で、泡盛は南蠻より移入せられたであらう。

織物 琉球絣・久米島紬・宮古細上布・芭蕉布などは其名高く縣外に移出せられてゐる。紺絣

壁上布は那覇・首里・小祿・南風原等に産し、獨特の琉球山藍を以て染抜くので光澤芳香他にその比を見ない。紺の細上布は宮古島の主産にして天正十年（二二四三）頃稻石といふ女が中山王に献する爲に創製したもので、原料は苧麻である。白の細上布は八重山の特産で特殊の染料クルを用ひる。久米島紬は眞綿より手引した紬糸又は玉糸を用ひ、土産の染料テカチ液に染めたもので價格安く平常着として歓迎されてゐる。

八九、獨特の農林獎勵法「原勝負」

沖縄の各町村には「原勝負」といふ風變りな産業獎勵法が毎年春秋二回行はれてゐる。之は役場吏員や各字區長などを審査委員として町村内を上方下方又は東西などに組分けをなして田畑耕作・山林の植栽保護・道路手入・河川浚渫・空地利用・農民勤惰等の一切に就いて實地調査を行はしめ、等級を査定して勝ち方、負け方を決定し、勝方には原（農）山各優勝旗又は金品を授け、負方は以前は或は過怠金を徴し、或は其の部落の責任者を公衆の面前に整列せしめて實に抱腹絶倒に値する假裝行列などをさせて耻をかゝせるのであつたが、今日では斯かる名譽毀損的な體罰

は非文明的だといふので廢せられてしまつた。以來此の獎勵法も昔日の生氣を失つたやうな氣もする。しかし之は農事の改良進歩が面目を一新した結果によるのもあらう。

此の行事の起源は今より百數十年前豊見城間切高安村に座安親雲上といふ篤行の人があり、治内田畑耕作方の獎勵のため農民の競争氣分を作興して一段の進歩を促したのが濫觴で、元來「原勝負」といふ名稱であるが、之が國頭郡のやうな山村にまで行はれるやうになつてから「原山勝負」とも稱せられ、後世更に、之に納税成績や其他村に於て必要な條項を附加して行つたので可成り廣汎な範圍に涉り、隨つて自治の上に重要な役割を担當することになつてゐる。

座安の考案した此の勝負が餘程効果的であつたので藩廳から布達して他の地域にも春秋二回之を勵行せしむることになつたのであるが、之より先、藩に於ては已に寛文九年（皇紀二二二九）従來算用奉行の兼攝してゐた事務を割いて新に高奉行所を設置し國中の農事及貢船貨物のことを管理せしめ、更に之より百年後明和三年（皇紀二四二六）に至り高奉行の職を割き田地奉行所を設置して専ら農政に當らしむことになつてゐた。かうした職制によつて漸次農事の指導獎勵が行はれ遂に「原勝負」の案出を誘致するに至つたのであらう。

九〇、「辻」の歴史と今後の問題

何といつても新來客の好奇心をそゝるのは南島獨特の發達を遂げた「辻」であらう。

寛文三年（皇紀二三三三）尙質王の冊封使張學禮の使録に依ると、侏儻じゆりやうと稱すものが澤山ゐて滞在中の支那人を誘惑して困るから久米村の總役に之を驅逐するやう命じたとのこと。何でも當時冊封使の宿館たる天使館附近及び市内各所に魔窟があつて風紀上面白からず寛文十二年辻・仲島の二ヶ所を設定したとあるから、彼是二百六七十年になつてゐる。

明治四十二年築港と關聯して仲島・渡地わたんぢの二ヶ所を廢して「辻」に併合したので今日の如く膨脹したのである。辻の組織は種々の点に於て他府縣のそれとは異なり、大體に於て料理屋と待合と貸座敷の三つを併合したものといつてよい。珍しいことには男の樓主が一人もなく、所謂文字通りの女護ヶ島である。樓主は年増の娼婦で、妓女との關係は多く雇傭關係であるが、從來年賦償還でもなく全く情誼の親しいもので借金を償ふ迄はおろか其後と雖も大抵養母養女の義理が存続する。一人前になる迄は抱親が一切の面倒を見てやるが、成人すると月極め數十圓宛納めて

替部屋持になる。しかし之は濟崩しではなく元金は一時拂をする迄其儘に残るのである。かういふ傳統が續く限り、一生浮ばれない。

彼等は娼を賣つたりすることは下手であるが、情誼に厚く禮儀の正しいのが特殊の風習で、所謂南國情緒の纏綿たる所以である。一般に酒を嗜まず、酒盃をさゝれると恭しく受け、盃洗にこぼして鄭重に返献する。相も變らぬ他人行儀である。又客前では餐を共にしないのが普通で、すべて昔からの不文法らしい。

愈々公娼廢止も眼前に迫つた時勢、果して辻は如何なる形式で解決されて行くであらうか。

聖代の今日、人身賣買の陋習は人道上の大問題であり、殊に遊里は、波上宮の神域に近く、市民最適の納涼地であるから、本縣風致の上からも速かに移轉、改革を斷行しなければならぬ大問題である。琉球と龍宮とは字音の類似のみではないらしい。浦島子たる者心せすして可ならんや。海豚うみいづなは食ひたし、命は惜しし、君子は危きに近寄るべからず。

九一、風變りな辻の氏神祭

辻の年中行事として最も有名なる「女郎馬行列」は古來舊正月二十日に行はれてゐる。多くの人は之を宣傳のための行事と思つてゐるらしいが、さうではない。之は廓の「氏神の神輿かつぎ」といつた様な祭典の一部で、昔の江戸の花魁道中とかいつた格に當り、多くの彼女達の生地なる農村の氏神祭及豊年祭を模して何時の時代よりか特別聚落でも行はれるやうになつたものである。

辻は上村渠（上村分れの義にて波の上方面）と前村渠（前村分れの義にて花崎方面）の二部落に分れ、舊部落の上村では廓の開祖を祀り、新部落の前村では火除け魔除けの石彫唐獅子を祀つてゐて、其の例祭が舊正月二十日の未明に執行され、引續き一千の美妓が各々の鎮守森を出發して波上宮大通を練つて神輿昇ぎに當る大行列が行はれるやうになつた譯で、最も選り抜いた美妓數十名は塗板で模型を作つた女郎馬を前帯に挟みユイ／＼の掛聲勇ましく手綱をあやつりつゝ踊り、其他の妓は數人、數十人宛一團體を作り、假裝扮裝の限りを盡し三味線太鼓に合せて各種各様の郷土舞踊又は新舞踊を演じつゝ踊り狂ふのである。それがいつとはなしに、午後に行はれるやうになつたのであるから市民總出で、歴々たる人々迄が、棧敷か何處かへ納まつて觀覽に及ぶ。イヤ全くの大宣傳といつてよい。到底筆舌の盡す所ではない。偕て、祭事の費用は毎年交

で、上村、前村共一人宛元老妓女連が新なる妓女を選抜して負擔を命ずる。其の選に入つた者を「盛前」といふ。相當蓄めたと思込まれたら是非引受けねばならぬ。一生名譽の奉仕ではあるらしいが、參觀交代以上の制度で大部疲弊するといふ話である。此の盛前は所謂神前にお米等を盛る司人で地方でいふ祝女の役目を交替に勤めるやうな形であるが、之には大盛前、盛前小と稱し、正副の二人宛を命じ、共同して氏神を祀り其の費用を分担させて居り、盛前小を勤め更に財を作りに上げたものに大盛前を勤めさせるので、二度の大役を無事に勤め上げた者は他日所謂辻町の元老とも稱すべき元締即ち評議員に昇格する譯である。盛前の宅には彌勒様などを一ケ年の期間だけ奉祀して居り、廓の神事に關する打合や朔望の禮拜など其處で行はれるので、相當な雜費が入り、暇が潰れるのである。

爰に記して置くべきことは辻が流行婦人界の魁をなしてゐることである。醇朴儉素で久しく紅白を塗るの裝身術を知らなかつた妓女達も大正の初頃より一般に白粉や紅を使ひ覺え、襖様入りの半襟や白足袋を用ひ、錦紗や丸帯を前結に着けるやうになり、今では餘所行の時は和裝に改めつゝあり、一躍洋裝をしてゐる姿さへ見るに至つた。

九二、那覇市見物

漂然と龍宮へ参られる方は勝手がわかりになるまいから此に簡單ながらお手引をいたすことにする。

最初に琉球の第一印象を興へるのは那覇である。一應旅館へ落付いて旅装を解くこととし、先づ第一に

琉球總鎮守官幣小社（よみのつへ）波上宮に参拜して航海の安全を奉謝し、御守護を祈ることにする。宮は室町時代の創建で當時皇室の御崇敬深かつた熊野權現即ち國土經營の神として伊弉册神と其の御子神たる速玉男（はやたまのを）之神、事解男（ことさまのを）之神の三柱をお祀りしてある。社務所には國寶の朝鮮鐘が秘藏されてあるが、之は九百七八十年前の鑄造にかゝり、世界に現存する朝鮮鐘四十六個の中、時代の古きと第六位を占め、古琉球の朝鮮貿易を物語る好資料である。全所に保存せられてある陽石は土俗學の参考品たるべく、何時の時代にかお宮の境内に置かれてあつたものであらう。

社前で那覇港一帯の珊瑚礁や、慶良間諸島の景觀を見晴らして、次はお隣りの護國寺へ詣る。

護國寺は當地眞言宗の中本寺で其の創立年代は判然しないが、已に今より五百五十年前察度王の祈願寺となつて居り、本土の僧頼重上人が之に居つたと傳へ、四百數十年前漂着した名僧日秀上人も此に在りて布教に従事したといふ。山門を入ると突當りに天満宮がある。之は沖繩唯一の天神様であるが、昔琉球の使者が明國よりの歸途颱風のために難破し其の中の一人は洋中漂流せる梅の木に托して一命を得たので、梅は菅公の愛木なるより以來深く天神様を信仰するやうになり、其の子孫が永祿二年薩摩へ遣はされた時彼地より天神様を勸請して祀つたといふ。社祠は初め天妃町にあつたが、置縣後此處へ移建せられた。

之と相並んで「ベッテルハイム記念碑」が立つてゐる。これは大正十五年宣教師米人イー・アー・ブル氏の發起によつて建設せられたもので、碑石に嵌込んであるのはベ博士が生れてから世を終る迄遍歴した國々の石に其の國名を勒して左の順序に排列してある。

1	ハンガリー	3	伊太利	5	希臘	7	英吉利	9	琉球
2	埃太利	4	埃及	6	土耳其	8	支那	10	合衆國

上部の銅版に刻んである文字は彼の翻譯した琉球語の聖書中、ヨハネ傳第四章、イエスがサマリヤの女に向つて訓へられた左の文句である。

耶蘇答へて曰く、すべて吾が與ふる水を飲む者は永遠に渴くことなし、又吾が與ふる水は肉の中に、泉となる永遠の生命湧き出づべし。

此の碑と相隣つて「台灣遭難者之墓」といふ石碑が立つてゐる。之は明治四年宮古島貢船が那覇より歸島の際暴風に吹流され台灣東岸なる生蕃の爲めに殺害された五十四名の墓である。此の事件は明治七年の台灣征伐となり、他日琉球處分の解決を容易ならしめた有力なる動機となつた。

次は護國寺を出て直お隣の天尊廟・天妃廟に詣る。之は道教のお宮で、五百五十年前明國より歸化した三十六姓即ち久米村の人々が祀つた祠で、南蠻貿易全盛時代尙泰久王の鑄造にかゝる鐘が懸つてゐる。猶ほ境内には昭和十五年建立の郷土の聖人程順則を祀つた程公祠もある。

孔子廟は棧橋より縣廳への大通り、泉崎橋に面してゐる。之は寛文十一年の創建で支那風に丹泥を塗り、廟堂正面に孔子の坐像を安置し、左右に四賢の立像を配してある。毎年春秋二月八月上丁の日嚴肅なる釋典の禮が行はれる。聖廟の隣に享保三年程順則の建設した明倫堂があり、中

に啓聖廟を設け啓聖公（孔子の父）及左右に四従の神主を祀つてある。此處には昔久米村子弟の教育所であつた。

其他那覇市内で見學すべき所は縣廳と隣接せる工業指導所で、琉球漆器の製造及び琉球絃等の製織・陶器の製作等を見る事が出来る。市内には郷土文獻を豊富に蒐藏せる縣立圖書館がある。水産・養蠶・園藝等の試験場は市の中央より離れて居りいづれも那覇入江を渡つて氣象台方面にある。

九三、首里は京都・那覇は大阪

首里が京都なら那覇は大阪に當つてゐる。即ち一は舊都であり、一は商工業地である。「京は着倒れ、阪は食倒れ、堺は建倒れ」とかいふ俗諺があるが、此處にも亦「首里は着倒れ、那覇は食倒れ」といふ俗語があつた。けれどそれは首里が行政の中心地であつた當時のことで、首里婦人が綺麗な琉球紅型を纏うてゐた時代の言葉であつた。

しかし今でも沖繩を知らうと思ふ人は一日も早く首里を見學して古琉球の雰圍氣の中に浸らなければならぬ。否首里を見なければ現在の沖繩も正しく理解することは困難である。現代文化の

體は古琉球の文化であり、而して古琉球の文化は日本固有文化を核心として支那・南蠻・朝鮮等所謂東洋諸國の文化をコンデンスして形成したものである。首里城一帶に漂ふ古韻、さゝやかながら琉球藝術を集めた城内の郷土博物館・圓覺寺・ハンタン山・龍潭附近の閑靜幽雅な気分などは人をして古琉球の盛時を想見せしむるに十分であり、古への龍宮城を訪れる感を催さしめる。那覇は人口七萬、首里は二萬、隣接町村の地域を併せて合計十萬と稱するから沖繩六十萬の六分の一は此の附近に集中してゐる譯である。

昔は首里が主都で、那覇は之に附隨した下町の格であつたが、廢藩置縣と同時に縣廳は那覇へ移つてしまつた。しかし、明治十二年三月十一日太政大臣の布達には「但縣廳ハ首里ニ置カレ候事」とあり、更に三月二十七日付を以て「假リニ那覇西村内務省出張所ヲ充當ス」と通告された。今も其の儘になつてゐるのであるが、若し縣廳を首里に設けられたとしたら首里は舊態依然として存したばかりでなく相當な繁榮をなしてゐたに違ひない。

那覇首里間は一里と稱するけれど其の相接する所は僅に半里に過ぎない。近く併合して大那覇市否沖繩市にでもなるであらう。

次に兩市の沿革現況の大要を述べることにする。抑も那覇は今より四百八十年室町時代迄は一個の島嶼であつたが、享徳元年尙金福王の冊封使渡來の時俄かに長虹堤を築いて連結したのである。

藩政時代は、首里三平等、那覇四町と呼んでゐた。當時久米（明國歸化人三十六姓の聚落）は獨立行政區域になつて居り、泊も亦城下の獨立區域であつた。那覇港向岸の垣花方面は明治三十六年小祿村より割いて那覇に編入したのである。

九四、舊都首里見物

首里城 龍潭池畔より、往時一千年間三十六島に號令してゐたと稱せらるゝ舊王城を望む時、こんもりと茂つた翠綠の上に殿閣の浮び出てゐる閑靜優雅な景觀は、夢か幻か繪か恍惚我を忘れしむるものがあり、凡そ如何なる靈筆と雖も描くことは出来ぬであらうとさへ思はれる。城は市の南方丘上に築かれ、面積一萬九千坪、築城は日本式で門樓は支那風である。正門の歡會門は尙眞王時代の建築で入母屋造りの樓と共に國寶に指定されてゐる。門前左右には、唐獅子の石像が

母安置され、門を入ると古來中山第一と稱せらるゝ、「瑞泉」俗に龍樋があり、四時清冽比類なき水を湛へ、其の上方には歴代冊封使の賛が堂々たる名文達筆で書遺されてある。

石階を上りつめると正面に琉球第一の大建築たる舊王城正殿が巍然として雲表に聳へてゐるのを瞻仰する。昔より「百油添」(百の浦々を襲ふの義)俗に唐搏風と稱へ、大玄關前石階の下に丈餘の石龍柱が左右に對立してゐる。正殿は間口九十五尺餘、深さ五十六尺餘、高き壇上より屋背迄五十四尺、前に一面の突出部と更に向拜とが附加せられ、合計百五十五坪餘、外觀は重層であるが内容は三層になつてゐる。

弘化三年の建築で腐朽甚だしかつたが、伊東博士の盡力によつて國寶に指定され十數萬圓を費して大修理を施した。現今はその奥に鎮在す縣社沖繩神社の拜殿となつてゐる。神社は源爲朝・舜天王・尙圓王・尙敬王・尙泰侯の五柱を祀り大正十三年の創建である。向つて左の北殿は一に議政殿と稱し俗に西の御殿と呼んでゐた。之は支那風で尙眞王以來冊封使款待のために明朝の制を用ひて建てたもので、冊封の大典は此處に於て行はれてゐたが、平常は攝收三司官が政務を執つてゐたといふ。ベルリ一行の來訪したのも此の建物であつた。元は内部の梁柱に昇龍を描き、

丹青の美を盡してゐたが、年久しく荒廢し、昭和十一年沖繩郷土協會が一萬圓を募つて之を營繕し今は縣教育會附設郷土博物館を開設してゐる。

南殿は俗に南風の御殿と稱し、純日本式の二階建である。寛永五年尙豊王時代に薩摩の使臣を歡待する目的を以て創建せられ、佳節に際し、王此の殿にて儀式を行はれたといふ。或年北殿に於て冊封の典禮が行はれた時薩摩は琉球官吏の制すのも聞かず窃かに南殿より簾越しに窺いてゐると、冊使徐葆光之を看破し「南殿有客」と叫んで琉吏の色を失はしめたといふ挿話もある。

其他城内には國王御書院の間たりし二階殿や、王女姉妹常住の世誇殿(現在社務所)などが残存してゐる。城奥の最高地、東のアザナは觀望台で首里全景は素より遠く中頭・島尻地方を睥睨し甚だ眺望に富んでゐる。城外、園比屋武嶽の石門並守禮門はいづれも國寶に指定され、附近に立つてゐる苔蒸した「國王頌德碑」及び「眞珠湊之碑」は假名漢字交りで書流してあり貴重な史料である。

圓覺寺 は昔天王天界の兩寺と共に三大古刹であつたが、他の二寺は廢せられてしまつた。之は今より四百五十年前尙眞王が父尙圓王の追福のために建立したもので、禪宗の本山に方り琉球

第一の巨利である。建築は鎌倉圓覺寺を模したものと稱せられ、今は尙家の私寺となつてゐるが大門・山門・佛殿及び琉球獨特の石門・放生池の石欄等いづれも國寶に指定されてゐる。殊に佛殿の礎盤や石欄の彫刻などは全國に類例を見ない藝術だといはれて居り、亦佛殿須彌壇背後の壁畫(金剛繪)は驚くべき精巧な密畫で建築と同時に畫いたのを元祿十年更に潤也を施したといふ。

辨財天堂 は圓覺寺前の圓鑑池の中に建て、ある。此處は四百六、七十年前尙徳王が南蠻より需めた孔雀・鸚鵡等を朝鮮王に献じた返禮として佛典一切經を贈つて來たので之を納むるため尙眞王時代に至り御經堂として建立したものであつたが、慶長年間薩摩の兵火に遇ひ、元和七年尙豊王之を復興せしめ辨財天堂に改めしめたのである。

龍潭 は今より五百年前第一尙氏の初期に開鑿したもので、周圍三町餘、面積二千七百坪、古へは重陽の節に肥龍船を浮べて冊封使を歡待したといふ。池畔に架けてある世持橋の石欄には魚貝等海鳥獨特の圖案が彫刻してあり、古琉球美術工藝の粹として實に國寶的價值がある。

尙侯爵邸 舊藩時代王世子の邸宅であり、今の縣立第一中學校の敷地にあつたのを安政四年此に移築したのである。建物七百坪、宅地三千五百坪、本殿は昔の儘の建築で庭園等すべて簡素に

して高尚典雅の氣韻を存する。大正十年三月長くも 今上陛下攝政官に在せし時御渡歐の途次御台臨遊ばされ、其後秩父宮・高松宮兩殿下其他各宮殿下御台臨の光榮を忝うした。古雅な石燈籠及びマト貝を嵌めた格子窓や古代屋久杉の親子戸など見るべきものも尠くない。

桃園農園 尙順男爵の經營になる全園は多く熱帯産の奇花芳卉・名木・嘉果等を栽培し、觀客四時絶ゆることなく、マスクメロン・マンゴウ・パパヤ・荔枝等の珍果を産し、名禽轉つて最も觀光客の耳目を喜ばせてゐる。

泡盛工場 首里は琉球泡盛の本場で醸造工場甚だ多く此の方面の視察をなす人もある。

九五、普天間宮詣で (中頭郡名所案内)

普天間權現は那覇を距る四里、中頭郡宜野灣村普天間にある。珊瑚礁の鍾乳洞の中に小祠を建て、熊野權現を勸請してある。此處は琉球八社の一で、祭神は波上宮と同じく、古來四民の崇信甚だ厚く諸願祈禱の靈地となつてゐる。洞内には無數の鍾乳石が垂下し、石筍亂立して奇觀を呈し、冷氣人を襲うて身に泌みるを覺え燭を照せば十數間にして山背に抜け出ることが出来る。

社前首里街道の並松は百數十年前藩政時代の植栽にかゝり、日光參詣道路の杉並木に類ふべく實に美觀である。神域に相接して古利神宮寺があり、四百五十年前尙泰久王時代義臣護佐丸の居城たりし中城々の建物を移建したと傳へてゐる。附近郡役所跡には農事試験地がある。

浦添城 首里より東一里には浦添城があり、昔、爲朝の一子舜天王の居城で「癸酉年高麗瓦匠造」の文字入りの古甃を發掘すべく、眺望絶佳の地である。

城下には「ようどれ」の王墓がある。此處は名君英祖王等の鎮まる所であり、後世之に相隣つて慶長年間薩摩に征服せられた尙寧王及び父祖の墓塋も築かれてある。「ようどれ」とは世^よ風れの義で諒闇といふ意であらう。

牧港 浦添城下國頭行の街道には當時の交易場たる牧港があり、源爲朝が妻子を留めて出帆したといふ傳説を以て著聞してゐる。方言マチナトの名稱を待港の意と解するは民間語源説で、文献では古へ「マヒミナト」と呼んでゐたことになつてゐる。琉球羽衣傳説及祭度土誕生地は此の附近にある。

中城城址 は中頭郡東岸の絶勝で、無双の勝地といふべく、海拔五百尺の高地に築いてある。

門壁未だ堅固に遺存し、城内に猶ほ村役場がある。琉球の楠公と稱せらるゝ義臣護佐丸盛春公が西海岸讀谷山座喜味城より中城に轉封せられて築いたと傳へてゐる。護佐丸は勝連按司阿摩和利の讒に遇ひ、中山王尙泰久の滅ぼす所となつた。

米國水師提督ペリー一行探險隊の實測に依れば中城城は壁の長さ二百三十五歩、幅七十歩、壁の基底の厚さ六乃至十二歩、上部の厚さ十二呎、傾斜に沿うて外側の最大高六十六呎、内側の高さ十二呎、外壁の傾斜六十度となつてゐる。城東臺城の中腹に護佐丸の墓がある。

九六、山紫水明の國頭巡り

那覇より西海岸に沿ひ牧港を超えると、間もなく縣鐵終点の嘉手納に着く。農林學校・警察署製糖工場などがある。附近比謝川の溪流は琉球耶馬溪の稱があり、泊城の奇觀も珍らしい。比謝江は仲島の名妓歌人「よしや」の古歌で著はれてゐる。

恨む比謝橋やなさけないぬ人の

此の身渡さてやりかけて置きやら

嘉手納より一里、讀谷山村を過ぎると愈々山岳起伏せる國頭郡に入り、やがて左手に嘉津宇の連山など變化に富める古生紀の風光が展開し、自動車は長汀曲浦を縫うて名護へひた走りに走るから實に愉快なる旅を續けることが出来る。間もなく恩納おんなに着く。

萬座毛 は恩納村役場所在地にあり、切り立てた屏風の如き珊瑚岩上の高原に廣漠たる芝生があり、海望無双眞に天下の絶景である。寄せては飛舞散亂する浪の花は壯觀此上なく、稍靜穩なる日は數丈絶壁の下に色彩濃厚なイロクズが遊泳してゐるのを見る。下村南海先生の歌に、

きりぎしの眼の下の水萌黄色に

魚の動きのくきやかに見ゆ

享保十一年尙敬王國頭御巡視の時此地に臨まれ、「萬人を座せしむるに足る」の意を寓して萬座毛と命名せられたと傳へてゐる。其の頃此地に「恩納なべ」といふ歌人があり、左の琉歌を詠んで御歡迎の臼太鼓踊に唱和せしめたといふ。

波の聲も止まれ風の聲もとまれ

首里天がなし美御機をがま

なべは萬葉歌人のやうに自由奔放にして熱烈な性情の女であつた。

恩納嶽おんなたけ彼方、里が生れ島

森も押しつけて此方こなたなさな

恩納より北五里にして名護へ着く。全地は山河秀麗恰も紀州和歌浦に髣髴たるものがあり、水清く山青く、四時ナゴヤカなるを以て此の名を負うてゐる。縣立三中・三高女・小學校・稅務署警察署・專賣所・農事試驗地・金融機關等が備はり、以前は郡衙の所在地で行政の中心であつた。商店街は藩政時代の馬場で、兩側は植樹を以て風致を添へ清爽の氣分を興へる。

運天港 は名護より四里、今歸仁村東端の僻地であるが、源爲朝公の上陸を以て聞え、風景絶佳夏時最も納涼に適する。昔時貢米積込等便利の爲め過去二百數十年此地に間切番所があつた。全港は徳川時代の末、佛米英の軍艦通商貿易交渉の爲め琉球訪問中屢々碇泊した所で、對岸屋我地島の西端には當時病没せる佛國將校二名の墓がある。

運天森には東郷元師の揮毫になる「源爲朝公上陸の趾」と彫つた記念碑が建て、あり、四阿あつちもあつて、觀望に便してゐる。之より峯傳ひに東へ進むと一本松の立つた珊瑚礁の懸崖があつて、

港口の水路が判然するばかりでなく、左右に古宇利、屋我地の二島を瞰下し、國立愛樂園は眼下に展開してゐる。又遠く蜿蜒たる本島最北端の國頭邊戸岬を眺め、水天髣髴の境に鹿兒島縣管内に屬せる與論島を望見することが出来る。凡そ此の風光を愛でずんば運天見學の價値は半減することを忘れてはならぬ。それから森を下ると山腹に北山城主の古墓「百按司墓」もぢやな其他民間模合墓などがあつて人骨累々として甕に充滿せるを見る。運天より西方二里にして北山城に達する。

今歸仁城址 宇今泊の南十二町、海拔三百尺の高地に築かれた山城で城門迄車が通じる。吉野朝時代琉球三山分裂の當時北山王の割據せし城地で面積六千坪、數十丈の絶壁を控へ、實に天下の嶮岨要害であり、亦其の風光は天下に得難い景觀である。堅牢なる城壁猶ほ遺存して古への面影を留め、礎石悉く残つて盛時の建築を想見せしむるものがある。「山北今歸仁城監守來歴碑」及び東郷元帥筆の記念碑が建つてゐる。北山王自刃の際兩斷した受劍石は碑石の背後にある。

城の前方海上に浮んでゐる伊平屋島は尙圓王の發祥地として名高い。

之より西半島を廻れば二里にして、本部町主邑渡久地に達すべく、漁港の修築は更生沖繩の一場面である。右に恰好宜しき伊江島、左にトラパーチン採掘で有名になつた瀬底島、新らしい珊

瑚礁の水無島などを眺めつゝ、殘波岬や恩納崎を右に見て一廻りすると名護に到るのである。

時日が許せば北方塩屋灣の閑靜を賞すべく、名護より歸途東海岸に出で、金武村の大鍾乳洞等を視、中頭郡東部の島々を眺めつゝ一路那覇へ歸る。

九七、風光明媚な久米島

久米島は幾度行つても飽くことを知らぬ魅力に富んだ島である。那覇より五十海里、小汽船又は發動汽船が一日越し位に通つてゐる今では無電の設備もあり、割合に便利である。米を産すること多きを以てクミ島と呼ばれ、久米は充て字である。

久米島は古生層であるから山川秀麗で、紬の名産地でもあり、人亦美しく全く南島の仙郷である。自給自足時代には文字通りの樂天地であつたに違ひないが、交易經濟の今日では山森は荒廢してしまひ四千石の米は食ふにも足らず、紬は安値で十萬圓そこらに下り二十萬圓の砂糖が其の主位を占めてゐるといふ調子である。周圍十二里、面積二方里餘、人口二萬近く、仲里・具志川二村になつてゐる。船着場は仲里村の儀間で、ハシケは具志川村の字鳥島へも出る。儀間には小

學校・警察派出所や無電局がある。久米島を視察する人は少なくとも二三日を要するが特に兩村の灌漑施設を見なければならぬ。山間の谿谷を堰止めて諸所に溜池を作り、山腹を堀り割り溝を通して灌漑に便し、傾斜地もすべて美田に化してゐる。

此の工事は同地舊家の記録及球陽に依れば慶長年間及尙敬王時代に幾多の水溝が開鑿されたといふ。

はんだ前の水や溝わてどよこす

三十まし三ましま水こめて（久米ハンタ前節）

續日本紀に元明天皇の和銅七年オホアソノケジ太朝臣遠建治等南島奄美・信覺・球美等の島人五十二人南島より至るとあり、奄美は今の大島、信覺は今の八重山石垣島、球美は久米島と解せられてゐる。果して然りとせば、隨分、此の島は古くから本土と交通があつたことになる。（一説に球美とは今の西表島で古見であるともいはれてゐる）久米島が琉球王の所轄に入つたのは遙かに下つて龜山天皇の文永元年（皇紀一九二四）中山英祖王五年で、北條時宗が執權に任ぜられた四五年前である。今より四五百年前は此の島にも按司達の割據した時代があり、古い城が残つてゐて興亡の歴史

を物語つてゐる。島には堂之比屋といふ天文学者がゐて、太陽を観測して季節を教へたと言ひ傳へられ、又島民に久米島紬の製法をも授けたといはれてゐる。

明應九年（皇紀二一六九）中山尙眞王が八重山の赤蜂征伐の時、久米島の君南風といふ女神官が従軍し奇策を以て大いに敵を惱まして凱旋したと正史に載つてゐる。

此の島は實に山紫水明な仙郷であるばかりでなく、人情も醇朴で人も美しく亦古歌に著聞してゐる。

白瀬走川はしかはに流れよる櫻

すくて思里おもとにぬきやいはけら（白瀬走川節）

久米の五葉の松下枝の枕

童思無藏わらへおみんぞやわうでまくら（久米ハンタ前節）

阿嘉あかのひげ水や上んかいど吹きゆる

かまど小が肝きも（心）やのぼりくんだり（阿嘉節）

九八、細上布と五勇士で名高い宮古島

宮古八重山の二群島を總稱して、先島群島といひ、奄美群島を「道の島」と唱ふるに對し、之を元島と呼ぶ。宮古列島中には宮古・伊良部・下地・池間・多良間・水納の八島があり、全域を一町（平良）四村（下地・城邊・伊良部・多良間）に別ち、總面積十六方里餘、人口六萬七千人に近く、生産の主なるものを砂糖・紺上布・水産物等とす。宮古支廳は宮古本島平良町に在つて、那覇を距る百七十哩凡そ十五時間を要し、午後五時那覇解纜の船は翌朝八時入港する。群島は凡そ珊瑚礁よりなつてゐて、地勢二百尺位波狀的に隆起し、島尻本島の南部と同一形式をなしてゐる。只下地村與那覇の西南一帯が沖積地になつてゐるのみである。

伊良部の隆起は割合に高く、大神島及其の對岸なる宮古本島の島尻一帯には第三紀層が露出してゐる。氣候は沖繩本島と大差なきも大野・山林一帯及下地村の一部には輕微な風土病マラリヤがある。

宮古八重山が琉球王の治下に服屬したのは察度王の四十一年（皇紀二〇五〇）で明國の招諭を

受けしより、十九年目に當つてゐる。

宮古にはアヤゴといふ長篇の歌が多い。之は本島のオモロと同格のもので色々の種類がある。

道の美らさや假屋の前 歌の美らさや宮古のアヤゴ

特産宮古上布は以前太平布と稱し、上布下布の區別があり、琉球政廳より薩摩への貢物の一であつて、之を織ることが島の婦女の重大任務となり嚴重なる監督の下に織製させられてゐた。

太平山とは宮古本島の名である。古へは平良・下地・砂川の三間切に分ち、其の本締めたる、藏元には三人の頭をおき、在番役を駐在せしめて之を監督させてゐた。置縣後も三間切は存続してゐたが明治三十年特例を以て一島一間切とし、其の職務は直ちに島廳（藏元）に於て島司以下之を執行し、明治四十一年四月島嶼町村制の實施に依り、新に平良・下地・城邊・伊良部の四村に區別した。多良間は平良の所轄より大正三年分村したのである。宮古・八重山には寛永十四年（二二九七）人頭税といふ特殊の税法が布かれ爾來三百年間貧乏子持はその苛酷に堪へなかつたが、明治三十五年地租税條例及び國稅徵收法の實施によつて撤廢せられた。

九九、歌の國舞の國八重山

二七〇

八重山はほんとに文字通り詩の國、歌の國、舞の國である。殆んど例外なく、各島ごとに自分の故里を讚美した歌がある。そしてそれに振付までして若人達が見事に踊つてゐる。全くユートピアである。彼の有名な鳩間節・小濱節・黒島口説・川平節・宮良節・白保節・竹富節・與那國しよんがない節といった按配に島々村々の歌が際限なくある。

桃里節といつて自分達の開拓移住した新村にむらを祝福した、

桃里とらてる島や、果報かふの島やれば

から嶽たけばこしやて、おやけ前まへなち

桃里と言ふ村は幸福に満ちた祝福された村であるから、から嶽を背景にして富貴の源なる田圃を前にしてゐる。

と言ふ意味で此の歌は今も残つて隣村の白保の人などに唱はれてゐる。けれど村人はマラリヤの爲めに絶滅して残つてゐないといふ悲惨な事實さへある。

爰に八重山の代表的に大きな鷺の鳥節といふ歌を御紹介して見よう。

大あかうの 根さしに

なりあかうの 本もとばへに

一の枝えだ ふみ登り

七の枝 ふみ登り

一ひとびらい 巢ねばかけ

七びらい 巢ねばかけ

一ひとびらい 卵たまご産し

一ひとびらい 卵たまごから

七びらい 卵たまごから

綾羽あやば 産すだしやうり

びる羽あやば 産すだしやうり

正ただ月の しとむて

二七一

元日の 朝ばな

東かい 飛びちけ

日ば かめ舞ひちけ

大きなあかうの木（榕樹の一種）の根元に、實の生るあかうの木の本ばへに、大鷲が一番下の枝をふみ登り、七つの枝をふみ登り、其の天を摩する上の方に一つの巢を作り、七つの巢をしつらへ、其の巢の中に一つの卵を産みつけ、七つの卵を産みつけた。そしてその一つの卵から七つの卵から、綾羽の美しい雛が孵化し、天絨絨のやうな羽の雛が生れ 正月元旦の朝まだき頃、東の空を目がけて、勢よく飛び立つた。萬象を照らし給ふ日輪目がけて元氣よく舞ひ上つて行つた。

あゝ何といふ雄大な民謡であらう。何といふ大自然の中に悠々と伸びた民族のたくましい姿であらう。次に童謡の一つを御紹介して見よう。本土の童謡に

お月様いくつ、十三七つ。

といふのがある。此の十三七つと言ふ数は一寸解しかねる数の言ひ表し方であるが、左の八重山

童謡によつて忽ち氷解するであらう。

月の美し^{トツカミカ}や、十日三日、女童美^{ムコトノカミ}し^{トツカミ}や、十七^{トツカミ}つ

月の美しいのは十三日、乙女の美しいのは十七といふ意味で、之を要約して「月の姫様よ貴女はおいくつですか」とお聞きしたとすると、お月様の美しいのは十三日だけれど、乙女として美しいのは十七だと答へたことになる。

十三日を「十日、三日」と二重にいふのは日本古來の數詞法で、八重山や沖繩島の田舎では今なほ老人などは十一日を十日一日、二十一日を二十日一日などと稱へてゐるのである。

一〇〇、八重山概観

八重山群島は那覇を去る二百五十哩の海上に散在し、宮古平良より石垣迄僅かに五五哩、數時間を要するのみである。石垣西表の二大島を始め、竹富・小濱・鳩間・黒島・新城・波照間・與那國の七島及び四五の無人島を含み總面積四十一方里、人口三萬一千、一町（石垣）三村（大濱竹富・與那國）に分ち、産物は水産物・米・畜産・石炭・林産物・上布等である。八重山は方言

エーマ、古文書にはヤエマとあり、八重の地名は七重八重で、マは間より轉じて、島の意に用ひられ、慶良間・池間・來間・鳩間等類例甚だ多く、山は太平山・馬齒山等支那人が島の義に使用するからであらう。

地質は石垣島は地質複雑で太古界あり、花崗岩及富士岩などあるが西表・與那國は第三紀層に屬し、西表島よりは石炭を産する。古來西表・石垣二島には風土病マラリヤがあつて廢村となつた部落が少くない。西表は山林多く住民少なきを以て之が巢源をなし、石垣も北部山村地帯は病源地である。しかし石垣・大濱二村の部落は殆んど海岸の隆起珊瑚礁の上にあつて無病地である。

主島石垣は山手に廣漠たる原野が展開して全く北海道の如き大陸的感^じを與へるが、マラリヤの爲め放置された所多く、近年漸く開墾助成法等の適用によつて開拓されつゝある。けれども全郡四十一方里の面積より見れば未だ九牛の一毛にも足らず、一方里密度僅かに七百五十人で全縣下三千七百人に比して著しき懸隔あるのみならず、中頭郡の七千五百人、島尻本島の一萬人に對比して驚くべき稀薄といはねばならぬ。寶庫八重山の開發は實に沖繩復興上重要視すべき問題である。

八重山は宮古と同様察度王四十一年（二〇五〇）沖繩に服屬し、大永四年（二一八四）初めて藏元を竹富島において行政を司らしめたが、其後藏元を石垣島に移した。後年石垣・宮良・大濱の三間切に分ち、各離島を之に分屬せしめ、別に與那國の一島を置き、三人の頭を任命して行政に當らしめ、在番役駐在して監督をなしてゐた。明治三十年特例を設けて一島一間切に改め、島廳（支廳）に於て島司以下行政を司り、明治四十一年島嶼町村制の施行によつて特別自治が行はれ、後竹富・大濱・與那國の三村獨立するに至つた。

昭和十六年十二月一日印刷
昭和十六年十二月五日發行

琉球百話奥付

定價 壹圓五拾錢

沖繩縣島尻郡眞和志村楚邊原一巽六

著作兼 發行者 島 袋 源 一 郎

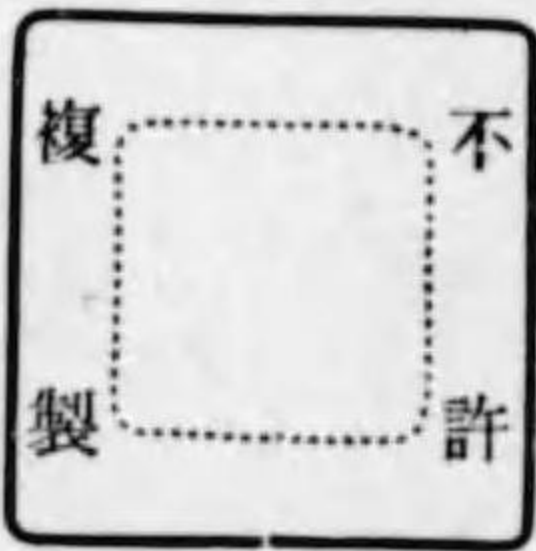
那覇市通堂町二ノ一

印刷者 嘉 味 田 朝 茂

那覇市通堂町二ノ一

印刷所 向 春 商 會 印刷 部

電話 二二三三番



沖繩縣那覇市大門前

賣捌所 沖繩書籍株式會社

電話 二〇番

931
9

島袋源一郎著

近刊	再版	五版 <small>傳説補遺</small>	五版 <small>新版</small>
沖繩の傳説	沖繩善行美談	沖繩歴史	沖繩案内
定四六版 價壹圓五拾錢	定四六版 價壹圓五拾錢	定四六版 價壹圓五拾錢	定四六版 價貳圓五拾錢

終

